



清俗紀聞

第一

年中行夏	目次	卷之一 序	禮帙
------	----	-------	----

五十四冊

ヲ 7  
3522  
1



門 27  
號 3522  
卷 1

寬政己未年新年

竊思館藏版

# 清俗紀聞

全部 十二卷

東都書肆

翫月堂發

江都木石町  
大目林  
共  
原安三郎  
印

41-9275



## 清俗紀聞序

我邦之於清國也壤地不接洋溟為阻屹  
然相峙不通使聘各為一區域則其土風  
之異俗尚之殊何預我耶然閩浙之民航  
海抵崎貿易交市以彼不足資我有餘  
國家亦不禁焉朱明以還因仍已久其間  
不能無黠賈奸商干紀之虞則亦不可未女

之小吏也於是官特置司以治之豈得已乎是故承斯任者非知彼土風俗尚以洞曉利害情偽之所在則亦無以宣我之政而服彼之心焉此則其所當留意也曩者飛驒守中川君子信在任于崎也釐務之暇命譯人詢彼土風俗尚探討搜究而叢為清俗紀聞手自點定自節序之儀吉

後

彼之土風俗尚實之不問可也而子信之有斯撰自有不得已者也余觀今之右族達官貴游子弟或輕佻豪侈是習而遠物珍玩是貴即一物之巧寄賞吳舶一事之竒擬摸清人而自詫以為雅尚韻事莫此過焉吁亦可慨矣竊恐是書一出或致好竒之癖滋甚輕佻之弊益長則大非子信

之志也。余為之序，并以告覽者。其豈欲歎  
歎哉。蓋亦有不得已者也。寬政十有一年  
秋八月，述齋林衡撰。

吉田直躬書

前

凶之禮，輿服之制，黻舍之法，以至屋室、飲  
饌、器財、玩具、日用、人事之微，旁逮緇黃之  
俗、部分、臚列、獵採、罔遺、洵稱綜該矣。後之  
官于崎者，留意是書，則可以免彼此枘鑿  
之患，而所為皆中窾矣。豈曰小補乎哉。予  
信余忘季交也。天資高朗，夙耽墳籍，其才  
之學之優，將大有所為。顧此等編纂瑣

序

末事原無須揄揚。但其一任不苟，必期拔本塞源如此，則佗所注措可知也。宜乎政績烜赫，物望歸焉。纔踰兩載，累被擢遷。抑夫海西之國，唐虞三代亡論也。降為漢為唐，其制度文為之隆，尚有所超軼乎萬國而四方取則焉。今也先王禮文冠裳之風悉就掃蕩，辮髮腥膻之俗已極淪溺。則

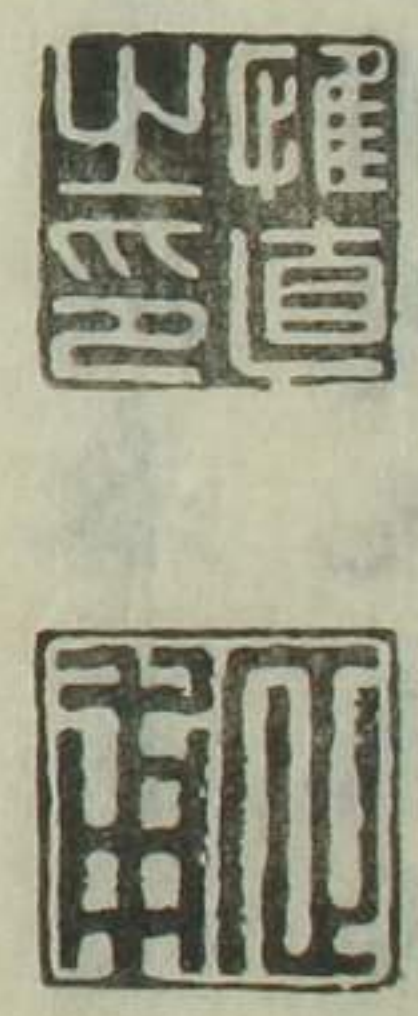
清俗紀聞序

中君子信之尹瓊浦，教化之暇，命譯吏就清高于館，問彼民俗吉凶之儀節及其名稱度數，即使侍史國字記之。又命畫師一一圖之，編次成書，名曰清俗紀聞。為卷六分都十三。夫國於天地而有與立焉，日用彝倫推諸四海而無所不準，則奚必華貴而夷賤哉。然必推中國

而華之、以貴之者、以其三代聖王之所  
國、而禮樂文章、非萬國所能及也、而今  
斯編所載清國風俗、以夏變于夷者十  
居二三、則似不足以貴重、然三代聖王  
之流風餘澤、延及於漢唐宋明者、亦未  
可謂蕩然掃地也、又清高之未瓊浦者、  
多係三吳之人、則其所說亦多係三吳  
之風俗、乃六朝以來、故家遺俗、確守不

變者、就斯編亦可以見其彷彿也、我  
東方古昔盛時、聘唐之舶、留學之員、傳  
乎彼而存乎此者、乃皆三代聖王之禮  
樂、則今日民間通行禮俗、有不與彼變  
于夷者同也、有志于講禮正俗者、彼此  
相質、而折其衷、則中君之此舉、未必無  
補於世教也、豈可以餘閑笑玩視之哉、  
頃、劄、刷、氏、請、而、公、諸、世、君、俾、予、題、其、首、

寬政己未秋九月 雪堂黑澤惟直撰



岡田顯忠書

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '東古昔' and '海報']*

清俗紀聞序

中川使君之奉職于長崎也。布政視事勤且勞矣。偶有暇日。則差舌人繪工數名。就清客於館。咨詢其民間動作禮節名物。象數隨而記之。又隨而圖之。一周歲而數十。百反使君手親選擇。取舍叙次。編之分十。有三部合成一書。初清客之受問。私舌人曰。臣等小人生長閩浙。其所能誦。特閩浙。

之俗耳。名物象數。亦唯閩浙矣。若夫清之  
廣莫方。不同倍。倍不同物。惡能其他之及  
哉。北京盛京之間。民俗名物。多為滿也。純  
矣。西南方。或大滿而小漢矣。其小滿而大漢  
亦以觀。唐宋遺風。若獨有閩浙而已。然  
則明府今日之求。不必他及。邪臣等亦不  
能他及也。蓋使天。之有邪。舉也。其意有  
二。西陲之政。固易莫重焉。清之客。猶我之

民矣。非審其風俗。明其好惡。察其情偽。  
不可得而治也。斯書而成。後之奉職者。長官  
小吏。咸將知所嚮焉。一也。誦法。聖賢究博  
致遠。細大弗遺。若民俗名物。固不可以不參  
諸後世。而卑野瑣屑。固有詳載。不似閩事  
身。刊書而成。後之學者。若其或摺什一。亦千百  
焉。二也。夫清客通于我。乃趾不一。而閩浙之  
民。實什之九。則吏者之用。閩浙而足矣。民俗



名物を以て於經傳者、要在於唐宋則書  
生之需、而潤滋而足矣。純滿大滿、我於何  
有。夫如斯使君今日之求、果不他及也。客之  
不能他及、而後奚傷。

寬政戊子七月朔、蕉園處士津國中井  
曾弘序于江都錦林客舍。



附言

○此書の靖陽、素は清人、其國民間の風俗を尋問して、此邦を  
語り直して記す處あり、素より清國東西風俗異なり、南北俗  
を殊にす。此編をよみて、普く清國の風俗と思ひ得る事、如  
く、今靖陽、素は清人多く、江南浙江の人、あれ、新記に  
處り、亦多く、江南浙江乃風俗と知るべし。

○圖繪は靖陽の畫師を清人の旅館に遣し、聞み、隨ひて圖し、新  
遠、不事、あれ、清人、昂、あれ、を正し、或は清人圖して示し、もの  
も多し、問答、教、授、あり、之、始、多、全、き、事、成、り、り、見、る、者、う、こ  
か、ひ、を、生、ず、れ、事、あり、れ。

○片假名を以て、右、附、る、もの、の、唐、音、好、り、平、假、名、成、り、り、右、み

附言

附る者續習又ハ和訓也方ハ附る者ハ和訓の仮名之但ハ和訓あり  
 多右子唐音あり者方ハ和訓を附る者あり和訓  
 の仮名原通事ハ出止ハ長壽語多ク同脱する者あり見女  
 志為ハ是を補ハ此取ハ一事あり和訓の語同クハ和訓あり見女  
 和訓ハ和訓あり  
 吉田喪祭年中行事ハ類崎陽在留の清人時ハ行ハ不足其畧  
 を見るに足止り器械玩弄の類モ又常ク此邦ハ舟船する物親ク  
 見ル不圖中事ハ新を以テ其餘編ハ其事成推テ知ル  
 答問僅ハ一年の間ハ一モ公勢ハ一モ和訓ハ遺  
 漏事ハ多ク此後寄陽ハ和訓ハ是を補ハ事ハ予ガ  
 望ル所トシテ也

清俗紀聞總目

○禮帙 卷之一 年中行事

○樂帙 卷之二 居家

○射帙 卷之三 冠服

卷之四 飲食

○御帙 卷之五 間學

卷之六 生誕  
 卷之七 冠禮  
 卷之八 婚禮

○書帙  
 卷之九 賓客  
 卷之十 羈旅  
 卷之十一 喪禮

○數帙  
 卷之十二 祭禮  
 卷之十三 僧徒

清俗紀聞總目終

清俗紀聞卷之一

年中行事

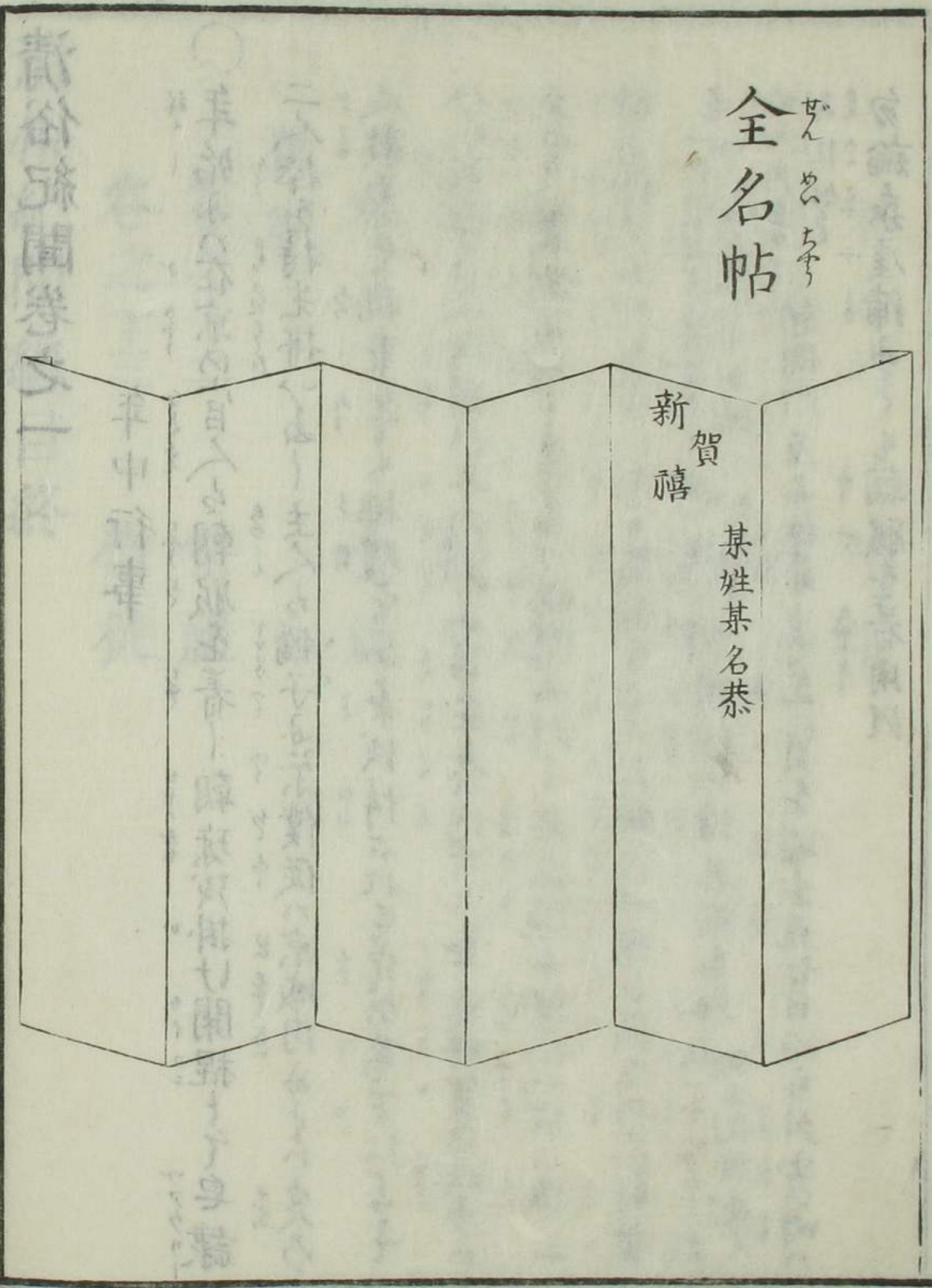
○年始み在京の官人の朝服を着し朝珠或掛け開棍とて皂隸  
 二人捧を持先拂つて主人の轎子に茶僕従へ京城内みづの定乃  
 人数ありて執事等も排列して事成許され官の寫下にとて  
 八人或ら六人附従ひ午門外中庭糸内する事也拜賀の次分ハ  
 文官ハ東側み列し武官ハ西側み列し其品級み随ひ一班二班三  
 班と段々み列を分一同ハ萬歳を唱へ三跪九叩頭の禮を行ひ拜賀  
 退朝の後名帖を持紙に全帖あり赤  
 姓名火書し諸衙門互み往來して年賀を述べ且七日迄ハ外出の附ハ  
 勿論赤屋浦みづも朝服を着用ス

年中行事

全名帖

新賀

某姓某名恭



○京外の官人とも元朝の朝服を着し、閑棍の皂隸行牌涼傘旗香

先み備(跟随の者)多人數召連其所の寺廟み安置あふ今上皇帝

の龍牌み詣と拜賀以龍牌を本に持て莊嚴一天子萬歲萬萬歲と書載有る

を品級みよるを行列等此差別にあふやまも洋み知るる縁の時

に任持役僧或連門前近迎送は又人みよる役僧のて挨拶すかも

ありまよる知府知縣等の官の名帖持帖の全帖上司官取(掲)

年賀或述ふまよる七日まよる朝服を着用也

○官人庶人とも元朝の先衣服を改め天地を拜し庶人とも天地を拜す

天地の恩成謝す次み家廟の神主或拜し兩親を拜し召使の奴僕に

新衣或着し主人を拜寸を外套の着せさるを許しは家廟み

香花燈燭年糕菓子茶飯酒並み橘子菱子竜眼肉の類を燒物

年中行夏

の餅四猪口等み盛く供（靴襪の製法ハ靴底手襪を） 禮拜終り喜神の  
 方みむらひ外出（喜神ハ惠方） 神廟佛院み系皆以香燭ハ寺廟み  
 備（おまじも携へ） 年終事あり惣して寺廟み多く水盥を設け故  
 家内より手洗淨め糸ふ蒸水入用の時寺中へ用ふは三日近の内子  
 親類朋友好方（名帖紙持行） 帖草帖赤紙祝詞 朋友肉之門口  
 みく祝詞を述親類又ハ親ハ方みくハ酒年糕等を出し祝土地  
 みく屠ハ蘇酒を製衣（江南浙江辺みくハ絶て用ふ者） 家内みくも用ハ  
 来客みく出さ事あふり且大戸の向ら眼隨二人或ハ三人召連遠路  
 来ハ轎子馬戎用ハ十五日近の内み羊禮を述来客の内空腹の者ハ  
 煖鍋とく此方の鍋料理中み仕ま外み小菜ハ餅りかけ並食せ  
 るむ九品物左の通り

煖鍋 緑豆麪 鶏 鴨 肉圓 香菰  
 冬筍 火腿 海參 魚翅  
 右の品煖鍋の内みく煮まわらみ賞設也  
 小菜 魚 火腿 鹽蛋 蝦禾 鹽蘿蔔  
 炒骨 青菓 紅棗  
 右煖鍋小菜料理の品定式みわら有合み増減す其の  
 外年始とて此方の雜煮吸物中みあ式ハ形

羊中行夏

單名帖

新

賀

禧

某姓某名恭

封筒

露申

請帖

封筒

露申

翌午寅治春茗奉迎

高軒祗聆

大教伏惟

早賜惠臨勿卻幸孔

右啓

大德望某號某姓老大人臺下

侍教生某頓首拜

元旦トシゴト初ハツ試シ毫コウとシテ吉利キリの文モン向キョウを赤紙アカシ母書ハハガキに元朝ゲンテウ般ハン用ヨウあり  
 者モノの便宜ヘンイの多オホク先除マキノゾメ夕ツキ母ハハ志シとシテむカふカおホとシテ惣サウして元日ゲンニチの吃素キツソの者モノ  
 多オホク一ヒト年の始ハジメ多オホク深コソクく慎マシむカあり三日サンニチ比ヒより春酒ハルサケ或ナラバ新ニヤウ年トシ禧酒シキサケ  
 かと唱ウタへ親類シンライ朋友トウバウ互タガヒ互タガヒ招請サウジウして酒宴サケウチを備ツクく  
料理の貴賤もあつてはひら  
 差別ある幸ありはくまう  
 たる献ケン 請帖ウチマテをツクりて前日マゼニチ母業内ハハノウチノウチに入イる  
帖の親類同  
 輩ハ單帖を用 在アりて歸人キニヤウの年會トシノミヤウ  
 せシに只實父母シツジツハハノチチの方カタの年賀トシガハのみミ也ナ

○商家ケウカの元朝ゲンテウと招牌サウハイを初ハツ内店ウチノテめく高賣カウバイ一曆イツレキの開市カイシとシテ不日フジツ母  
 招牌サウハイを掛カケふ此日ココノヒ店開テンカイの程ハジメひとシテ年代トシノトキその不フ高賣カウバイ仲向ナカムカ代トキ移シり  
 酒宴サケウチ後ノチ設ツクく船索フネノシの出行チウシンとシテ不日フジツ母業ハハノウチノウチ初ハツ初ハツ初ハツ初ハツ  
 店却テンケツを盤帳ハンチャウと唱ウタへ開市カイシの前マゼ後ノチ母ハハかシらシて年透トシノトキを見ミあハる前マゼ  
 年の高賣カウバイ銀高ギンカウあハるハる品物モノ有高カウバイ等帳トウチャウ合勘カウカン定テイ也ナ

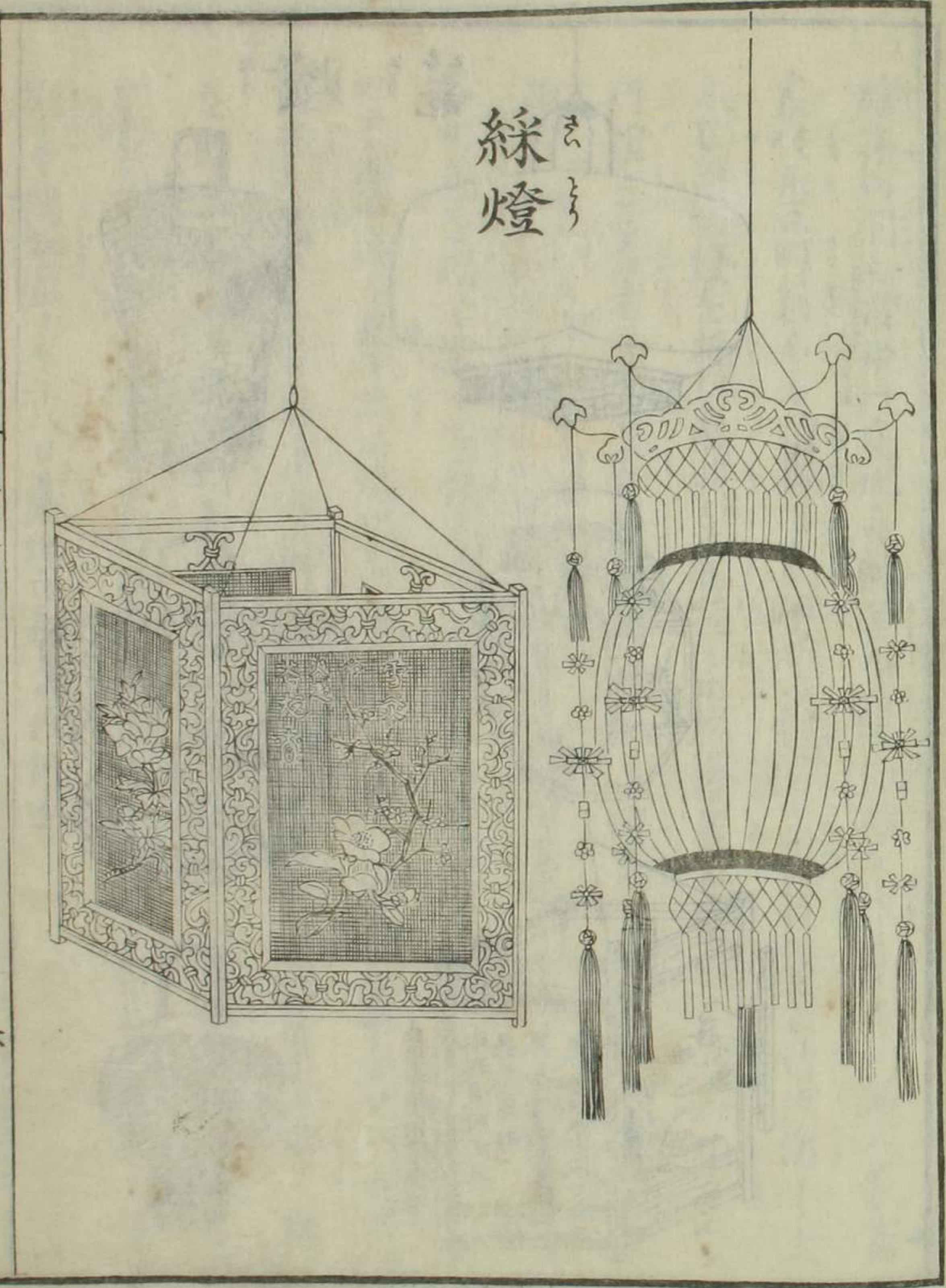
招 牌

松茂號定織紬緞發販

此の招牌は、商家の元朝と招牌を初内店めく高賣一曆の開市と不日母  
 招牌を掛ふ此日店開の程ひと年代その不高賣仲向代移り  
 酒宴後設く船索の出行と不日母業初初初初  
 店却を盤帳と唱へ開市の前後母かして年透を見ある前  
 年の高賣銀高あるる品物有高等帳合勘定也

醫家いけの神農しんのうの儀ぎ年とし糕菓子かかし菓物くわぶつ供とも禮拜らいはい六日むつき近ちかみ收とむ酒さけ宴えん成なり  
 設たてけ親おや友ともを招まねく事ことあり○正月しょうげつ七日ななひを人ひと日ひ八日やっぴ代か穀こく日ひ九日ここのひを豆まめ  
 日ひ十日とっぴち代か綿わた日ひと唱なへ此こゝ四日よっぴ天あま氣き和なご晴はる豊とよ年としありと云い傳つたへ七日ななひの  
 人ひとの始はじめとせられさ日ひの久く人ひと日ひと唱なへう故ゆゑ水みづ浙せつ江かう意いの人ひとの斤しん量りやうをり  
 多おほ身み體たいの量りやう月つき代かけ裁さを足たりを秤はかり人ひととみ江南かうなんをみくハ立た夏なつの日ひみ  
 加かふよ一ひと夏なつ之の瘦すくせむふ為ためありやつ傳つたへ○正月しょうげつ十三日じゅうさんび代か上かみ燈とう十五日じゅうごひを  
 元もと宵よ十八日じゅうはちび代か落おち燈とうとふ此こゝ六日むつきの代か燈とう夜よと唱なへ十二日じふにび夜よとて家いえの  
 門かど前まへの燈とうを燃もへ官くわん府ふ富ふ家かの向むかひの門かど前まへの勿な論ろん堂どう上かみの樓ろう上かみ  
 ちと結むす絲いととく紅こう縮しゆく綿わたを四よ方かたの張はり兩りやう端たんを柱はしら或あるは上かみ檻かぎ等らより垂た  
 下したくみ花はなの形かたちあり形かたちの結むすひさげ種あひくく此こゝ饒にぎは燈とう籠かごを燃もへ  
 玉たま羊やう角かく等らや玉たま酒さけ宴えんを設たてけ家いえの系けい竹たけ等ら催もよほす事ことあり  
 張はりらゆふ

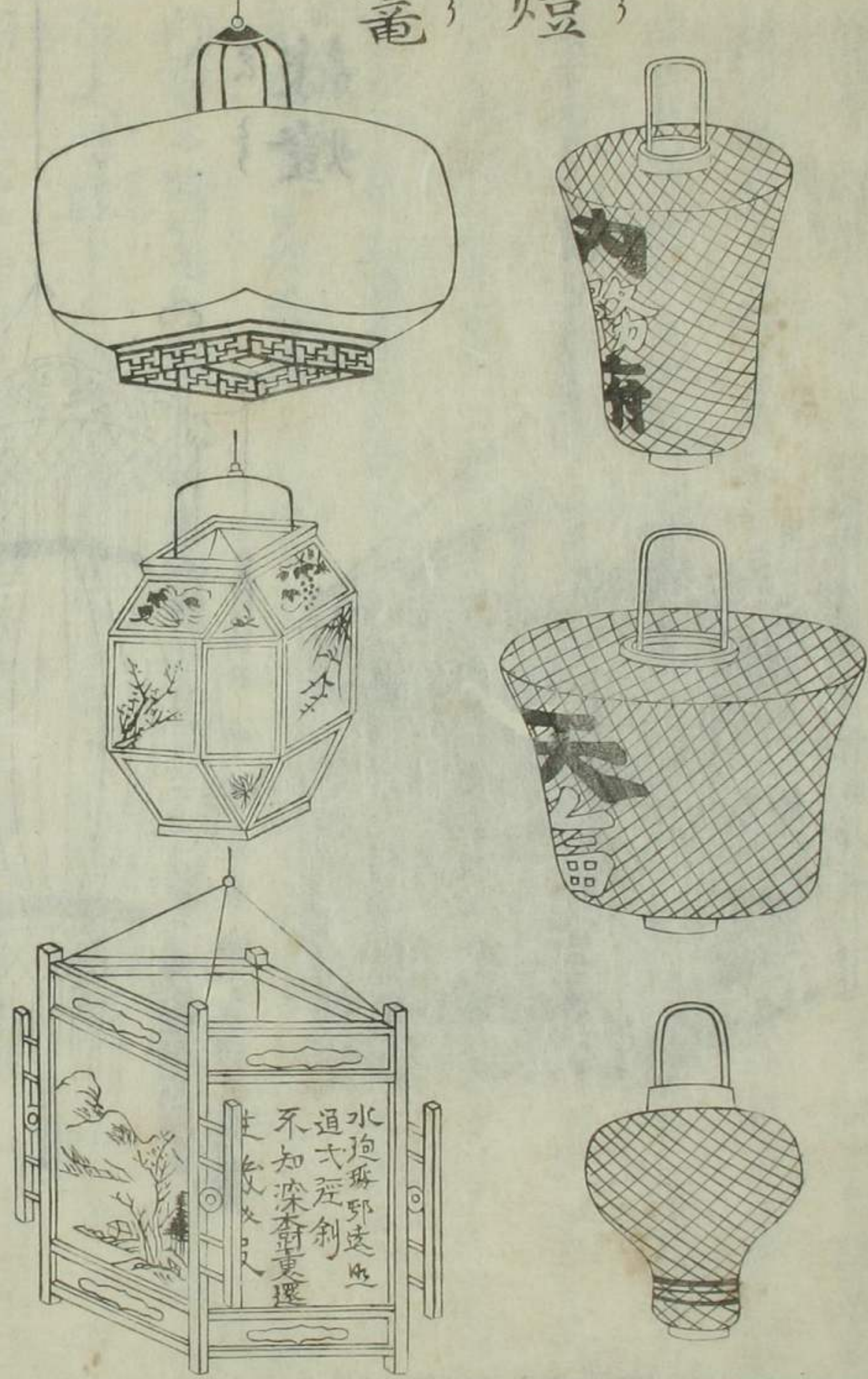
絲燈



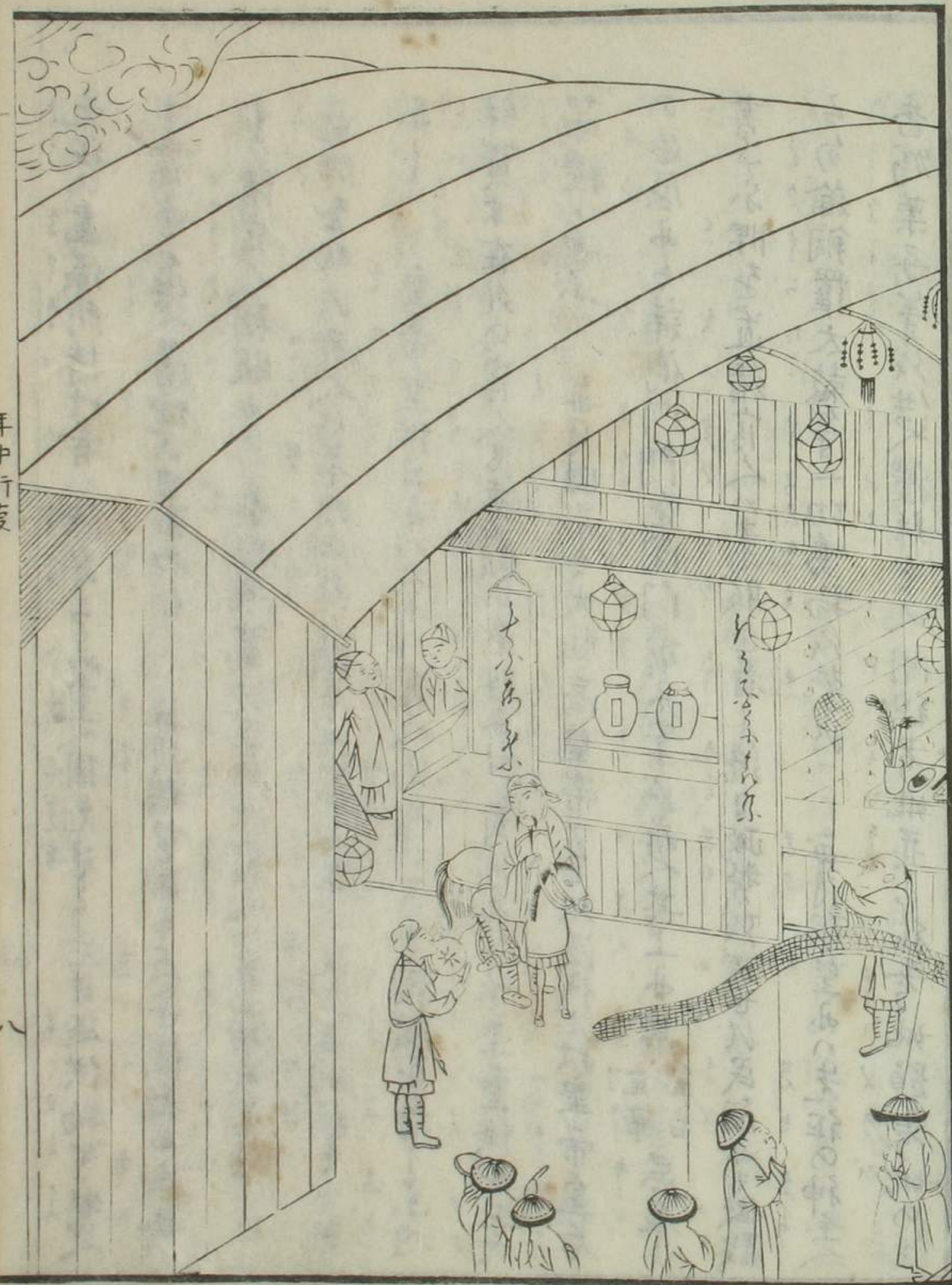
年中行支



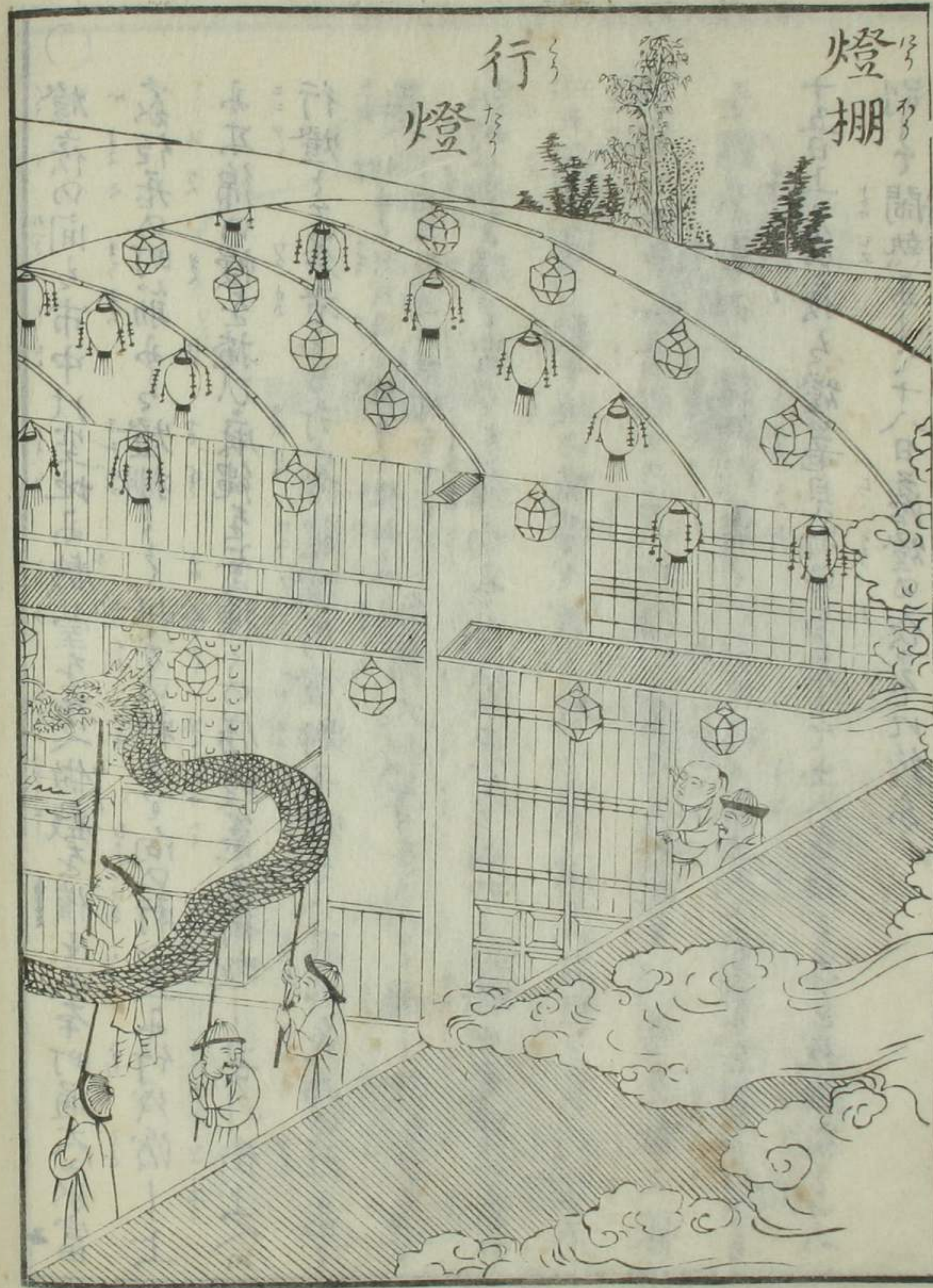
籠 燈



○ 燈夜の間に市中に空地に戲臺を擡ぐ。做戲を催す。又本町通大家富  
 家任居の町筋に燈棚とて此方の軒より向の軒へ互に竹皮液の上  
 み本綿の幔を掩ひ麻繩を垂種々の傍燈籠を掛懸し其外街上へ  
 行燈とて若者ども打寄龍燈馬燈獅子燈と其外魚鳥の形色々  
 擡ぐ。竹皮液の紙を張彩色。銅羅太鼓等をのりく。唯一燈籠をほ  
 ひ町筋を踊り歩くと趣向ある。装束等同か。就中電燈ハ長さ  
 四五間も造り數十挺の蠟燭火燈。數人あり。ほふ右數多の行燈乃  
 肉或る六戸知音の方へ行踊ふ事あり其附る酒肴を勸又銀  
 を賜ふ事あり諸衙門兼くハ庶人揚り出入り事を持すれども  
 十五日上元の夜は燈籠見物の多きとて出入り事を持すれども  
 別して開熱あして十八日三落燈の夜すてに終ふ



手中行燈

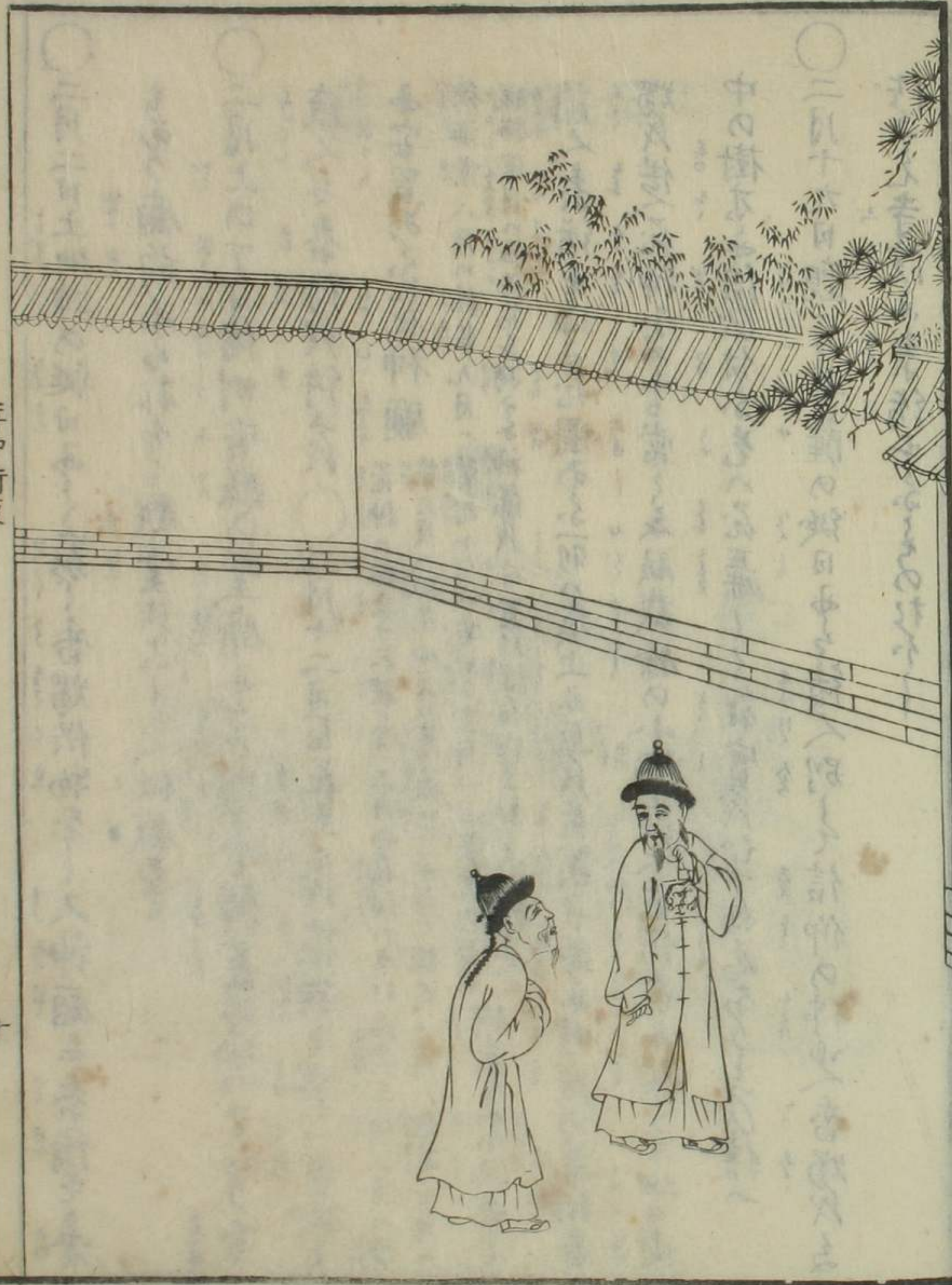


行燈

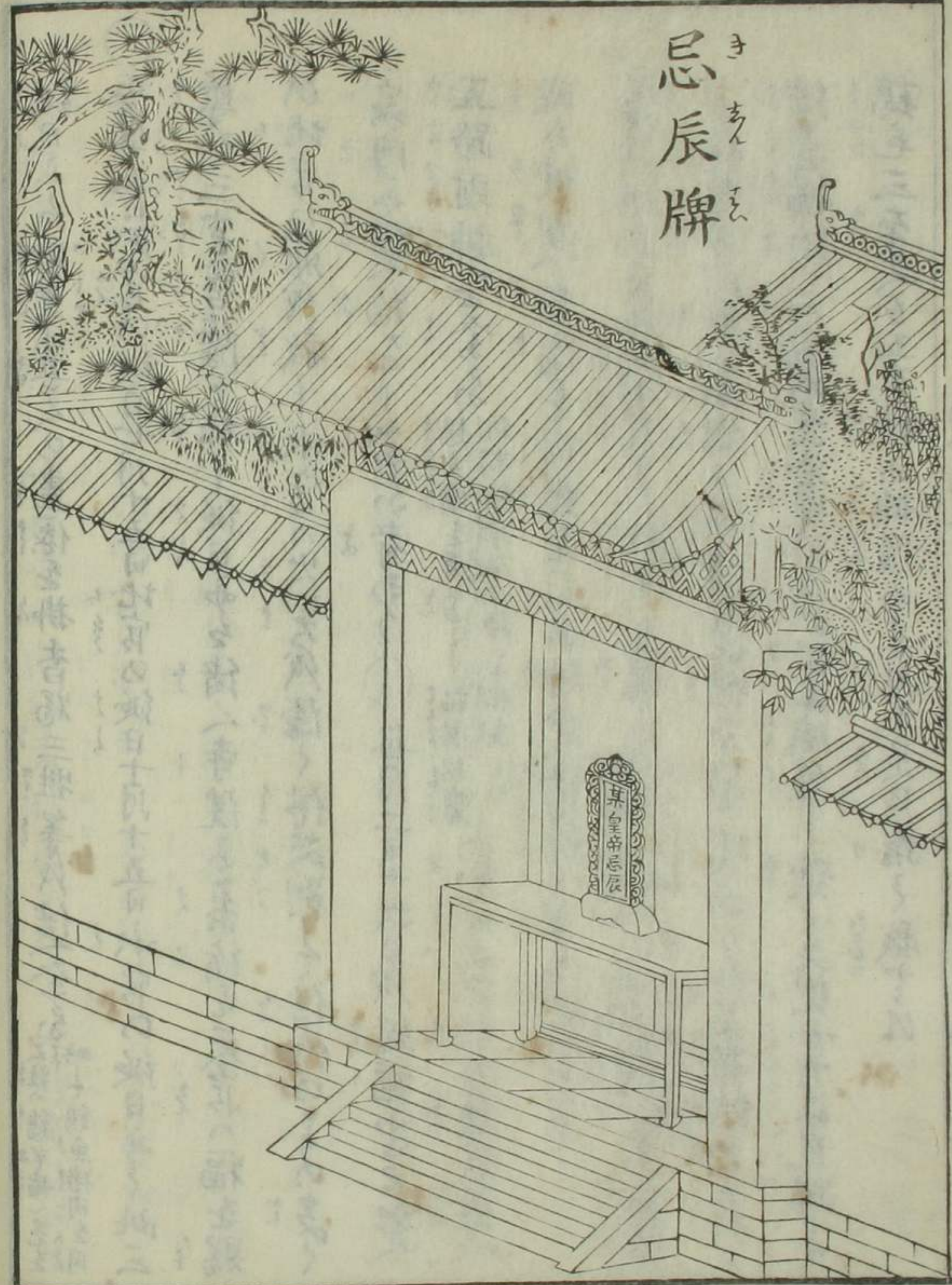
燈棚

○先祖の畫像所持此者ハ除夕と堂上掛元日より三日迄供物等惣之  
十五日ハ之供入落焼の日取收む ○毎月朔望母天子便殿出御  
あり諸官人朝服せし糸内拜賀以外此官人ハ寺廟母糸内  
竜牌を拜以庶人ハ年始の外ハ朝を五節向ふ定式ハ廻礼する事  
あり ○皇帝聖誕日ハ大小の官人年始の志朝服を着し糸内  
拜賀す在外の官人も寺廟の竜牌母拜賀以元日冬至至聖誕を三大  
節禮と唱ふ ○毎月朔望母大祖高皇帝と以後代ハ此皇帝皇后  
の忌辰母諸衙門門を閉門前母案成居其上母某皇帝忌辰と  
書しハ牌を置諸官人ハ素服を着し終日政務政理せし民間母做戲  
る勿論銅羅太鼓等一切鳴物成禁む ○毎月朔望母先祖の神主  
香燭菓子等成供禮拜又開祖考妣並祖考妣頭考妣の生

誕日母廳堂母其人の畫像を掛香燭三牲等成供祭祭  
○正月十五日天官の誕日七月十五日地官の誕日十月十五日水官の誕日母此二  
尊を三官菩薩と稱し誕日母諸寺院母糸内詣て天官ハ福を賜  
ひ地官ハ罪成赦し水官ハ火災成除く佛成別と信仰の多き  
家内母供物をす糸内者あり ○二月十六日成近福母之成  
五路財神を奉ふ 趙玄壇を奉る者ハ招財招寶 家毎母三牲香燭成供  
或ハ神廟ハ糸内詣て錢財を司ハ神成諸商人重母祀成なる  
○正月二月三月の間小児ハ紙鳶を揚ふ 紙鳶一名鷓子ハ形胡蝶或ハ  
とて竹を引け形ハ曲輪子ハ綾等の幅二三歩程の切を強母掛紙鳶の成  
結着揚放てハ風成之響成なる故ハ風箏と號く又児女成見踢と  
鶏毛三本又ハ五本錢母挿緒母包と足成踏く戲成  
年中行支



忌辰牌



三官菩薩



年中行事

十一

○二月二日土地神の誕日みく家々香燭供物をし又神廟み糸緒をる者

もあり廟前みらねわく戯臺成さし之做戲あり

○二月上旬の丁日諸州府縣の聖廟み官所より釋菜のありはつるを

庶人ら糸緒成行さる ○二月十二日百花生見成花朝と唱一省おと

み安置ある花神廟 花神ハ都合十三體あり正月の花神ハ手に梅花を持二月ハ杏

秋海棠八月ハ桂花九月ハ菊花十月ハ芙蓉十一月ハ山茶花十二月ハ 何止も糸紀あり

臘梅閏月ハ牡丹花を持 神係成安置は係らほま初らかみ知る

諸人糸緒をゆる花園あり一羽の庭上み卓成菓菓子並み時候の菓物香

燭成供成神をみ常々衣服裁餘の小切を貯へ並何色み拍寸此日園

○二月十九日觀音菩薩の誕日み緒人別して信仰の佛也香燭成

はさる寺院み糸緒をるものねら

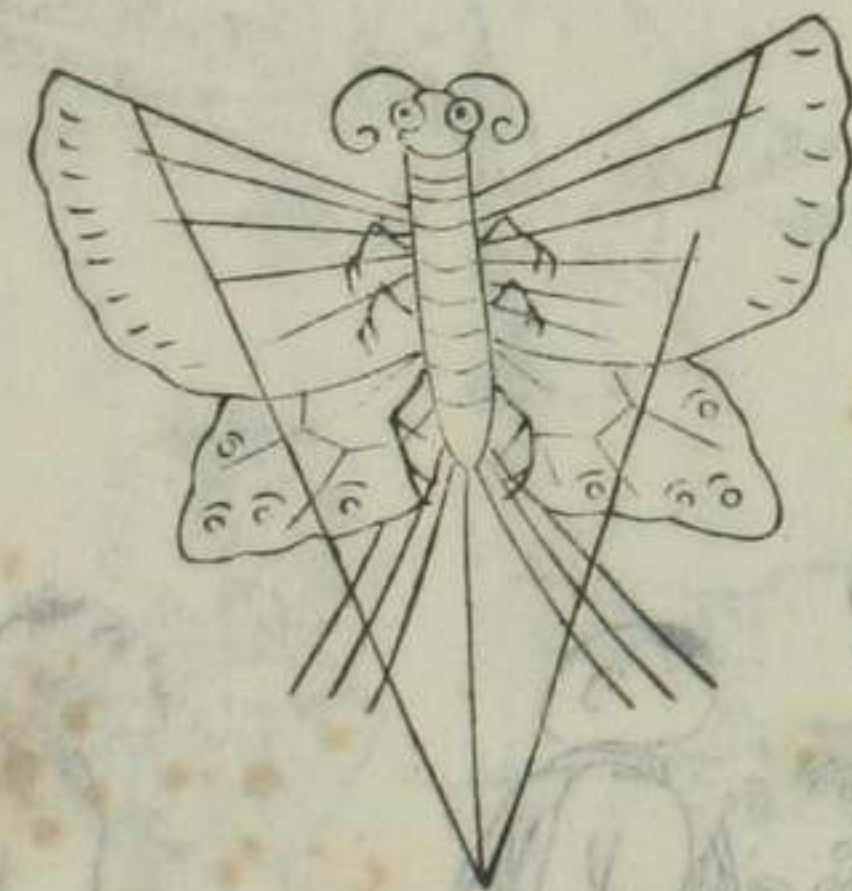
箏  
琴



紙  
鳶



見  
踢



年中行夏

十二

五  
路  
財  
神





年中行夏

十三



○上巳の日家々菜薺花を門戸の左右其外灶上床上等一挿置蟻成製  
 せし以傳ふ ○三月清明の日家々柳枝を門戸挿諸蟲生せし  
 為ありとひはふ ○三月清明の日家々掃墓少て一名掃 貴賤同姓  
 の一族先祖の墓一列並り三牲並み菓子菓物等成書に盛る卓上供  
 香燭燭燭酒を凌奠一眞衣大金を燒 眞衣の衣振を盡きたる紙大金の  
 禮拜畢供物等成近道の野原に推門行祠堂ある者祠堂  
 小打官宴を催及又杭州より西湖舟船成遊あり官人とも朝服の着  
 せし轎子馬等諸人とも随意用也跟随の多し貴賤亦等か  
 一家老少一同ぬる内婦女の多く帯を他家嫁したる羊の極て其  
 家の墓一列並り羊とをいふ事もあり京都とも同俗之儒生  
 とも異ふ事あり家内供物等あり祭式年始れむ

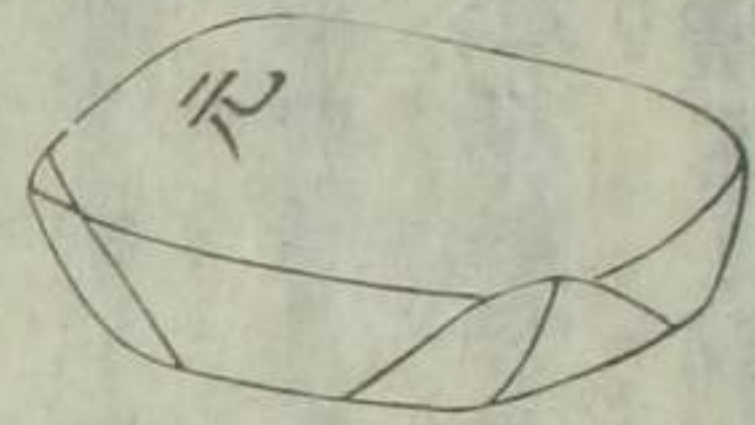
○清明の内諸州縣共勅命を奉り其比の城隍廟の神像を轎子  
 清一 住古より知府知縣其外の官人厚使ある人後み至りて勅命ありて廟を建て安置其  
 儀の守神とて是を城隍廟と名付聲言の何比の城隍の何の代の何官と云々所同  
 儀の儀中首手足の動ずぬ衣冠等其人在世の 先小銅羅を打鳴し次小行  
 品級も陸ひ候且城隍の向かあり城隍廟と云々 旗數奉涼傘  
 牌一對 行脚ハ長さ二尺五寸程幅一尺七寸程の塗板板三尺程の柄をばす板板  
 奉旨祭祀と彫成儀一対城隍使司と彫成儀一対何事も金字あり 轎子の跡みの鼓樂成奏して  
 一奉鸞駕數茶成立列杯 鸞駕ハ錦も鎗辨弁 轎子の跡みの鼓樂成奏して  
 諸役人郊外の墳墓ある列み送る行祀孤の爲み幕も構ある廟壇  
 精一 廟壇ある列の草葺の假屋 椅子を置儀成居前み三牲供物等を卓  
 上み並其所の子孫吊ふ者なき之儀の亡靈を奉る是を祀孤と云々奉官ふ  
 らびみ諸官吏等禮拜身とて後諸人衆皆以知府知縣と生民を司る  
 故み陽官と城隍と亡靈成司ふ故み陰官と唱ふ府あり知府縣ふ  
 是が知縣の格式あり行列也



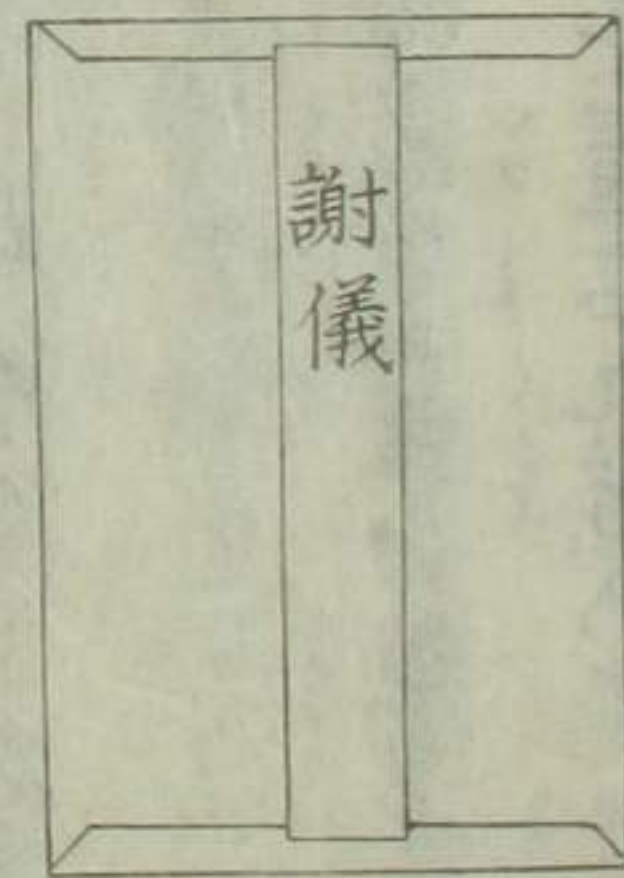
○三月十五日趙玄壇の誕日あり家々供物等近福の財ありてを神廟に奉納  
せし者もあり玄壇の殿の總兵官を勤むる人あり幼年の時深山に入り仙  
術を學び種々神奇あり故諸人は尊敬し後周の武王紂王を伐つに  
出せり死後其王上天其徳を感し神封して後財を司るといふ由故  
諸商人專信仰せり ○三月廿三日の天后聖母誕日の祭あり又二月八月  
春秋の祭は上の祭日代用也此三祀の廟前にお做戯ありて諸人衆詣  
多しを船神火走洋の人々都々信作し家内の廳堂或は外の間  
みくも清浄なる所にお神像を安置し香燭菓子菓物等を種々  
供へ奉るなり ○立夏前後帽子替の節は前廣く朝廷より幾  
月幾日換戴帽とて宣旨諸州縣に降し右の宣旨を板し書  
各衙門の門上へ掛ふ諸人は是を見く其日か至ると涼帽を改る暖帽を

九月寒露の前夜同格にお宣旨ありて衣服を氣候の寒暖に随ひ勝  
手次にお着用せしむる宣旨降ふ事あり靴子の四季ともに用也  
立夏端午中秋冬至歲暮此五節にお書學の師其外醫師等へ金  
銀端物を以て謝儀を贈るあり端午中秋歲暮の三節にお送る者  
もあり且書學の師にお一節にお元糸銀二十圓程白紙にお包み赤紙の  
袋にお入し上にお小長尺赤紙を掛其にお代儀又謝儀と書下にお姓名  
を記しを圓銀にお包み内包の紙にお包み書一切銀多れば星と記し量目  
書は銀の數の記し別にお帖等用ゆる事あり并画にお入し遠く醫師の  
謝儀は疾の輕重より家の貧富よりして齊かた  
○四月八日釋迦佛誕日あり寺々九條竜亭を堂中にお設け竜亭の内にお  
盆を居白檀にお刻する釋迦の立像を置右九條の竜口より香水を

銀錠  
包法



封袋



九條竜亭



吐出佛躰み灌ぐ住持ありみ大衆等蕭笛を吹鈴を鳴し小鼓雲羅  
等を打樂成奏し佛事を行ふ故み諸人衆請多しむ所みよて浴佛  
等此執りいなく唯常み安置ある釋迦佛へ是也指すか地方もあす

○四月十四日呂洞賓の誕日呂純陽先師と称す廿八日神農の生日みく此兩日醫家

みら畫像を掛三牲菓子菓物等成供之を親類朋友を招き酒

宴を設く○五月八朔日より五日迄八月十日より十五日迄十二月八

十五日比と晦日の夜迄此三夜諸州府縣ともに掛賣金銀貸借

等変弄を右の期み至ると先銀高の書付成遣し至迄日限までみ

取まふ右銀高の書付成遣し成送帳と云清弄ある書面を消

商人一返に○五月五日端午の佳節みの家粽子を搦一名角

糯米を灰汁み浸し蘆葉成りて三角の又雄黄菖蒲根を細末し徳宛酒

年中行交

舟入午時ツル舟フネ至キ是レを欣ニ幼少コの男女オトコメみら大黃ダイウ大蒜ダイス菖蒲ショブ根ネを少シくマ  
 系ケに貫ス身ミ元ノ舟フネ投ナ又マ雄黃ユウウの粉コを酒サケに交マ面部オモてを塗マ邪氣ジャキを  
 避サくわら口カ合カ堂ドウの隅サみ吹フ掛カ不フ是レの毒蟲ドクチュウを禁マずる為タあり婦人フメの  
 借カ糸イト成ナりて人ヒト形カタ虎コ蜈蚣ボコ蛇ヘビ等の形カタを小チく簪カサネみ扱アり頭カサ上ノ舟フネ挿サ是レを  
 健符ケンフとシ且ナ堂ドウ上ノ鐘ショウ馗ウ關カン帝テイ畫エ儀ギ掛カ前ノ舟フネ菖蒲ショブ艾葉アイエフを花瓶ケイブツに  
 挿サ門カド戸ノの左ヒダリ右ミダリも赤紙アカシめ根ネを包ツ挿サ赤糸アカイトに左ヒダリの文モノを  
 書カ門カド戸ノ其ノ外ノも張テ不フ邪ジャ氣キ成ナ排ハ意イあり

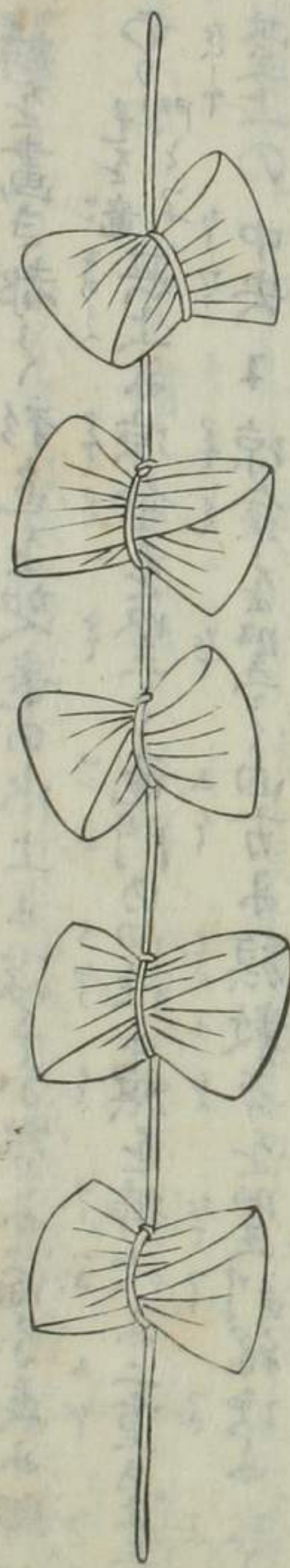
五月五日午時書

赤口白舌盡消滅

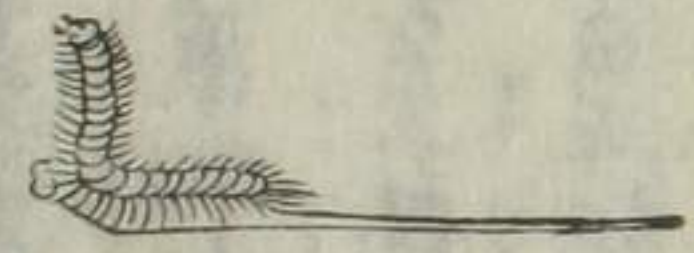
菖蒲如劍斬八節妖邪

艾葉如旗招四時吉慶

粽子

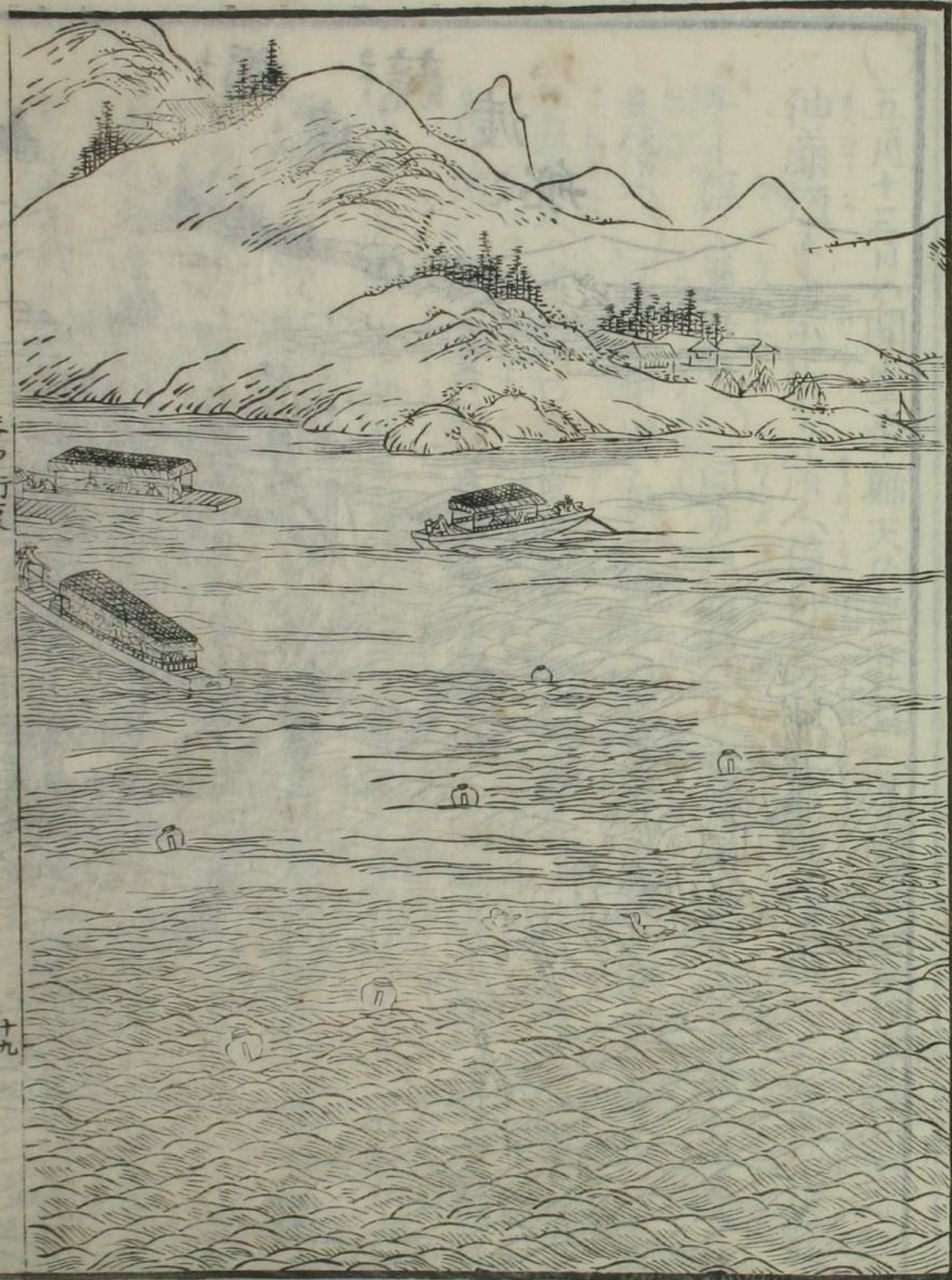


健符



○五月五日山野えや遊あそ行り一は葉草はを採とりては置かす事も又ま常にも採り  
貯たくわふ者あり○同日ちみちに親類あ互あみに粽子ちま並ばみに魚類い猪肉ちく塩し蛋たまご批ひ  
把つか梅子うめ等ら時とき候に菓物くだを本盤ほんばん盛も合ごを送おくふ八月はち十二月じふも都合あ  
三さん度どの賜物たまものあり足あを三節禮さんせつらいとし何なにもも四種しゆしゆ六種ろくしゆ送おくふ半はんの數かずを  
用もちひも○朔日しよくじつ六日むかひ近ちか江湖こくわわる地方ちほうの教艘けうさうの竜船りゆうせんを浮う競渡きやうた也なり  
ら長ながさ五ご六ろく間幅まなび二に間程まなび猛まうみに竜頭りゆうとう驢ろみに竜尾りゆうびを造つくる船ふねの全ぜん舟ふねみに竜  
鱗りんを畫えき都みやこくに衫色しんしきを加くわ竜りゆうの水みづ上うへみに涼すずふふ勢いきほみに儀ぎふに表あ牌はい樓ろう  
りを門かどとし共とも上うへみに涼傘すずかさをか竜門りゆうもんの四柱しよちゆうみに旗はたを挿さ次つぎみに二重にじゆうの臺たい有あ  
臺上たいじやうの中央ちゆうじやうに涼傘すずかさをか四よ方ほうみに旗はた數かずをか列れつ杯はい次つぎみに亭てい或ある  
備そな共とも上うへみに涼傘すずかさ有あ亭ていの兩りゆう眼がんみに櫛くし于こ代しろ構かま足あしみに旗はた數かずをか變へん驢ろみに  
大おほ徳とく一いち本ほん竜尾りゆうびの上うへみに斜しやみに挿さ傾かたむ  
旗涼傘の裡に鏡鏡子縮綿  
等み後浴して美罪をけくす  
色儀をれを

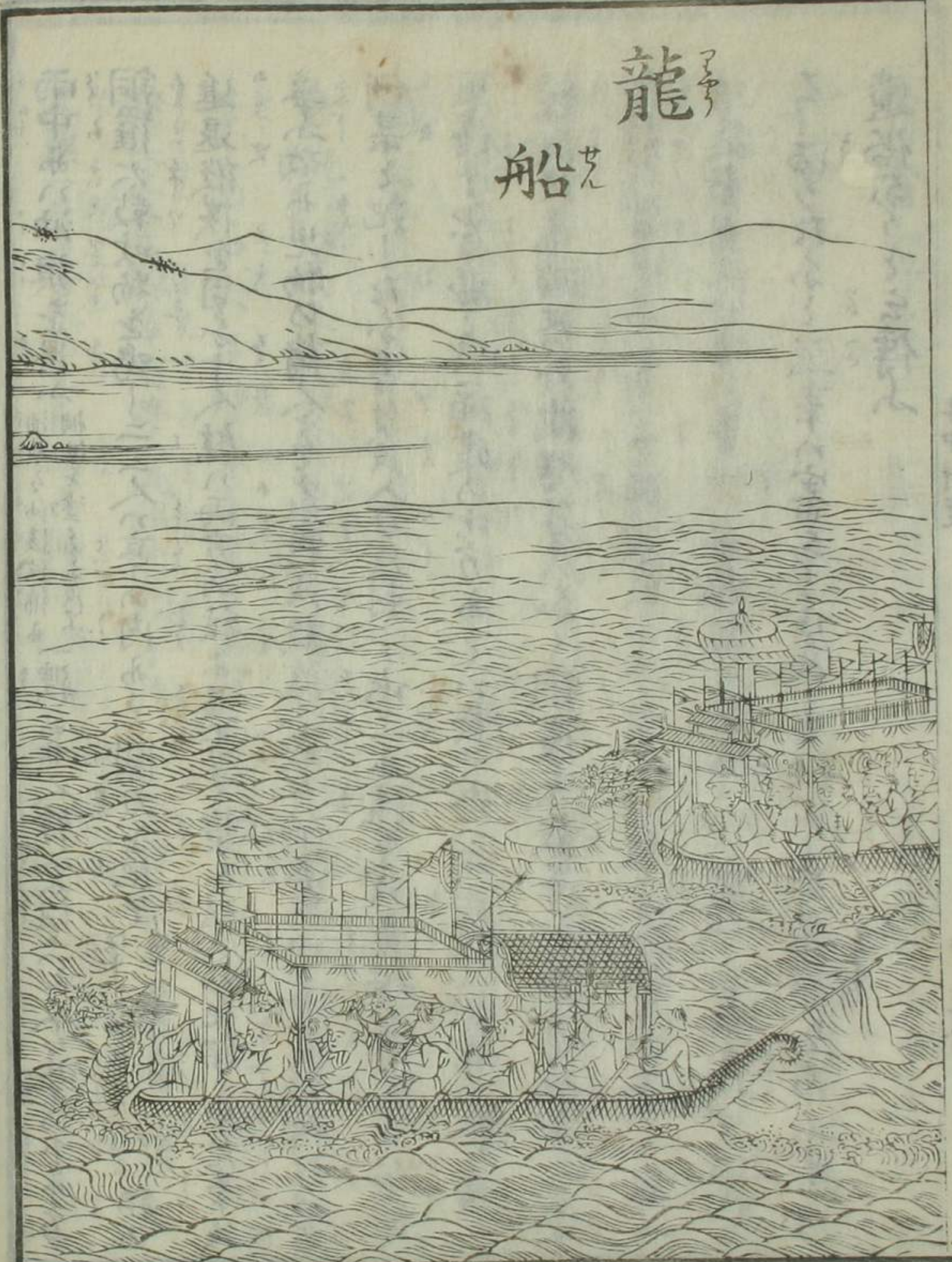
兩中りゆうちゆうみに油旗あぶらひを用もちふ油旗は油を塗る旗也  
銅羅どうら太鼓たいこ吹物ふきものを鳴な一いち三さん人にんの亭ていの内うちみに關刀くわんとうを把とり把は柄を青竜刀の形也  
進退しんたい儀ぎを司つかさどふ十じゆ人にん餘あまの兩方りゆうほうの弦げんみに並なら指さく指は樂がくをか加くわ船ふねとし早はや事こと或ある  
爭あみに故ゆゑみに見物けんぶつの楮かみ人にんとし家鴨けあひ放はな流ながへ流は或ある酒壺しゆわの内うちみに賞銀しょうぎん何なん程ほど姓せい名な  
何なん某たれとし記しるした事こと書か付づ成なり入口いりぐち封ふうじに水みづ上うへみに流ながる流は或ある竜船りゆうせんの者もの先まへを争あみに  
取と得とる取は或ある成勝なりかちとし以も福建ふっけんの地方ちほうみに長ながさ五ご六ろく間幅まなび二に間程まなび一いち間餘まなびの船ふねを擡た  
競渡きやうた也なり其その外ほか旗はた儀ぎ等らの如ごとく銅羅どうら太鼓たいこ等ら打うち打は十じゆ数かず十じゆ人にん余あま  
組ぐみ競渡きやうた也なりを官くわん所しよを許ゆる成なり受うけ受はみに也なり放はな流ながる流は或ある禁かぎみに事こともも如ごとく  
多おほ人數にんず集あり集はつる事こと以も辛論しんろん等らをか中ちゆうに制せい定ていす事ことの何なんれの代しろに  
不ふあらなら事ことの審しんみにははととも往い古こより屈原くわんげんを吊たふ吊は乃なり  
遺俗いじゆくありと云い傳でんふ

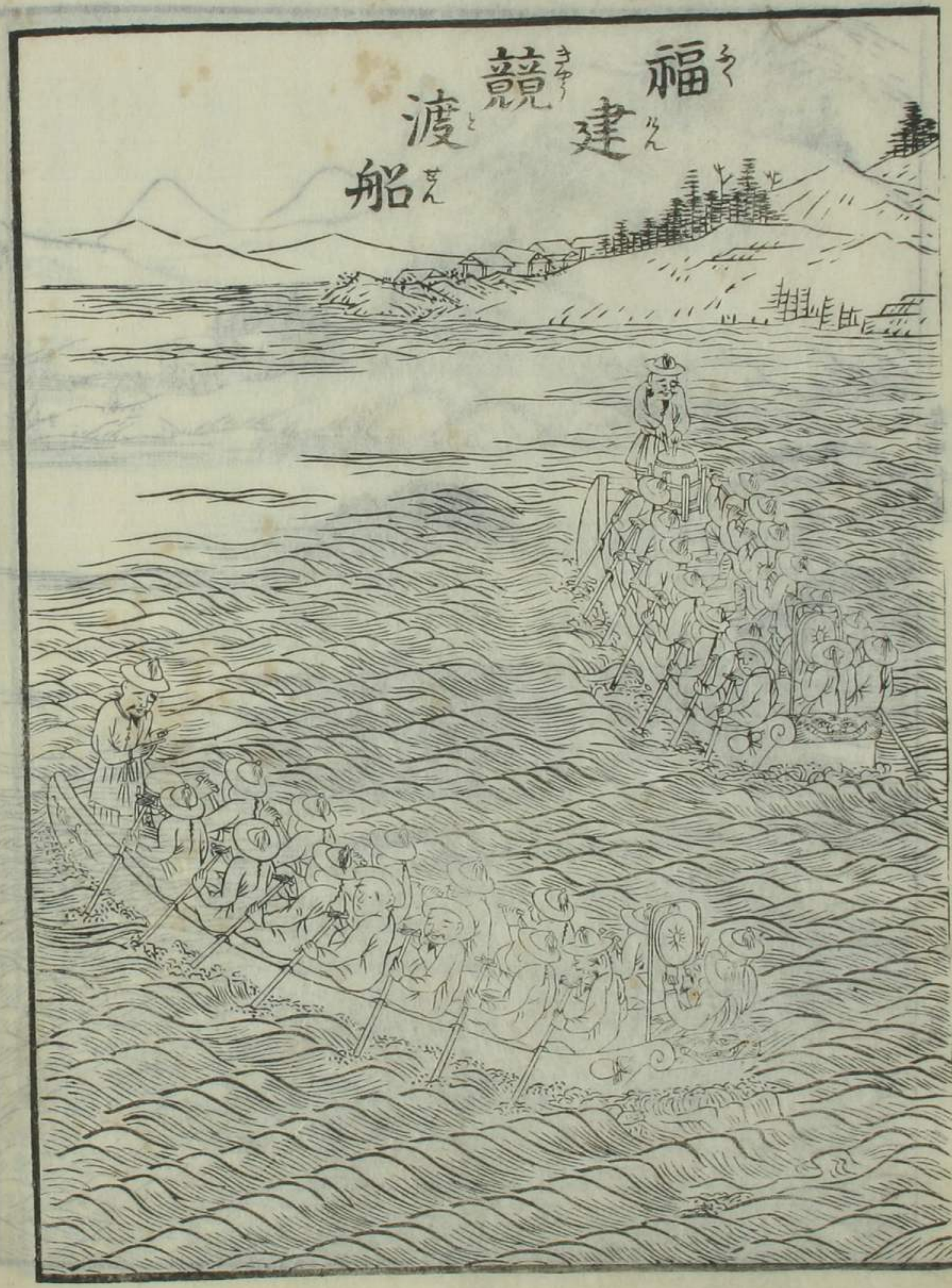


年中行支

十九

龍リウ  
船セン





五月十二日ハ關聖帝歸天の祭日二月八月上の戌の日ハ春秋の祭日也  
 神廟何れも祭祀あり諸人信仰の神故家々神像香燭三牲種々供物  
 在り深く尊敬也○同日伐竹酔日と唱へ竹を裁きハ根付葉不中  
 云傳ハ○梅雨中濕氣伐拂ゆる免若木を焚尚又書房丹ハ芸香  
 を焚是の書籍の蠹魚伐制する免也○六月六日天氣快晴也  
 是ハ諸人多く書籍衣服等を曝し○同日水伐貯へ醬油を制  
 する事あり此日有限ハ三伏の内天氣快晴の日伐見合制を  
 する者もあらず其制法等詳ハ  
 其制法等詳ハ  
 飲食の部み出  
 み塗又瓦の日み焼くを當止ハ其冬凍瘡生せむと云  
 暑中氷を賣者あり是を須魚菓物等を冷しあつる盆み盛  
 見ものみ以別々遠路魚運入時々氷を以損せざる様み致し中入

年中行事



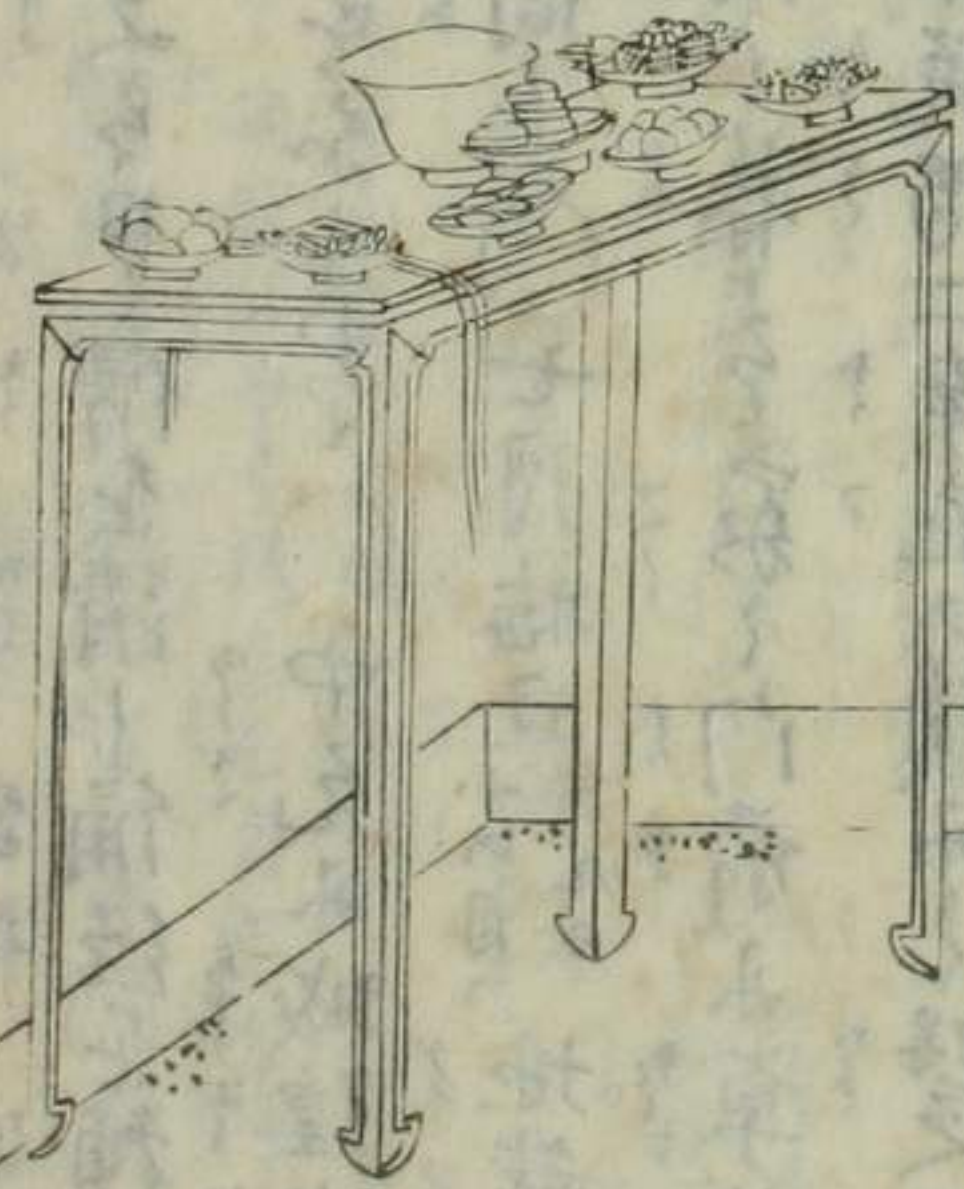
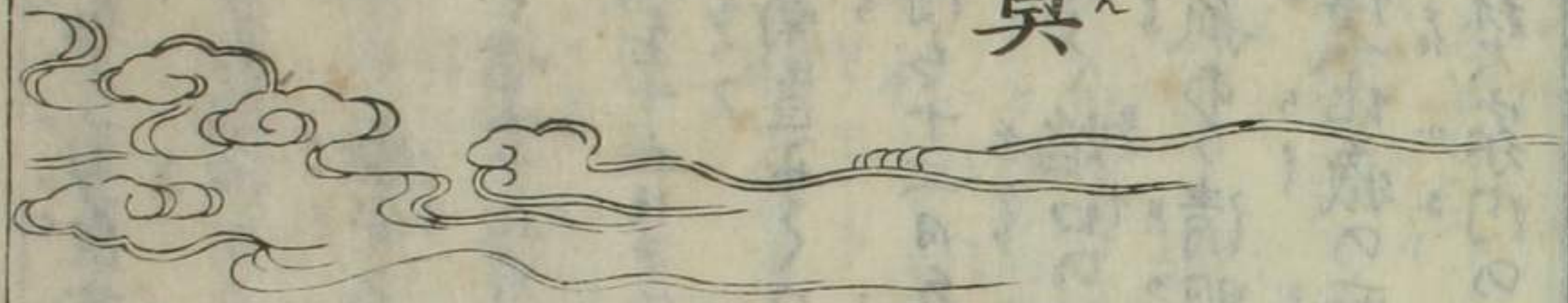
氷廠

年中行度

社一

魚商人の目く百斤二百斤で買入鮮魚成養魚  
 方と寒の内山中陰冷の場前水深九二三丈溜さ三四丈の穴を掘内は  
 火成焚然地成搗望ぬ数万斤の氷を入上石を西傍ひ又土をぬく氣  
 此漏らふやうに堅く繕其上草草の假屋を建雨水成防ぐ是れ  
 氷廠と号く暑の時み至る賣出凡  
 ○七月七日成巧日と唱(露臺)樓の前舟架造り成仕出三方舟欄子を付屋根を  
 卓成居菓子菓物みく七品(品物さ)針七本緒糸七を成  
 牽牛織女の二星み借(夜半み至る)幼女とを拜(一平)と  
 借(糸を五色)を(針)を穿針乞巧と云  
 申(五八十二)開(聖帝)神天の(祭日)八(八)土の(日)成(香)行(成)本(月)分

乞巧奠



年中行夏

廿二





○七月七日家々菊葉菱子茄子蘭花豆等菊葉を小舟に漬し皮を剥き四つに割り油の中揚げる蘭花の形小舟に

麦の煉粉を附油中揚食は是を巧菓とす ○七月十二日夜先祖の亡

霊を迎ふとて一廳堂の上座を草を香華燈燭茶湯代供禮拜是を

接祖先と唱ふ十二日と茶酒飯魚肉雜豆腐温飽其外時候の菓物

野菜類を十五日まで日々改め供ふり地方みよとて十七日夜まで家々

もわら江南をみよと十五日一日祭記供物等異ふ事れ且二年の

喪わら内ち十二日夜一日又日僧を清く誦経を頼むを富貴の

者の宅みよと燭口の供養をせふもあす ○中元み城隍廟の陰官を

請ふ祀孤あり清明の時み同 ○七月晦日小の月地藏菩薩の誕

日とて傳へ地藏の願ふ糸指し暮るる家々門前み卓代並香燭小

線香を焚家内の者一人み蠟燭二奉宛の積みく礎といふ人五の二十

挺を竹杭み差地上み立列絲懸すよとて地燈とす

○八月二日灶神の誕日とて家々香燭並み糕を供ふ糕は蒸す餅を大餅に

○八月十五日宮の誕日とて傳へ家々露臺み卓代設斗香並み月餅

斗香ハ斗外を小形み造て天を入線香代を月餅の裏粉を肉み胡麻西瓜の種

撒挽仁青皮等を刻白砂糖み交縮し胡麻油中揚るを月餅み備り圓く揚る大小有

西瓜梨子柿等圓形菓物の類代供へ家内打寄酒食を設明月を

賞すよとて朋友等取寄り看月會とて酒宴を催すもあり

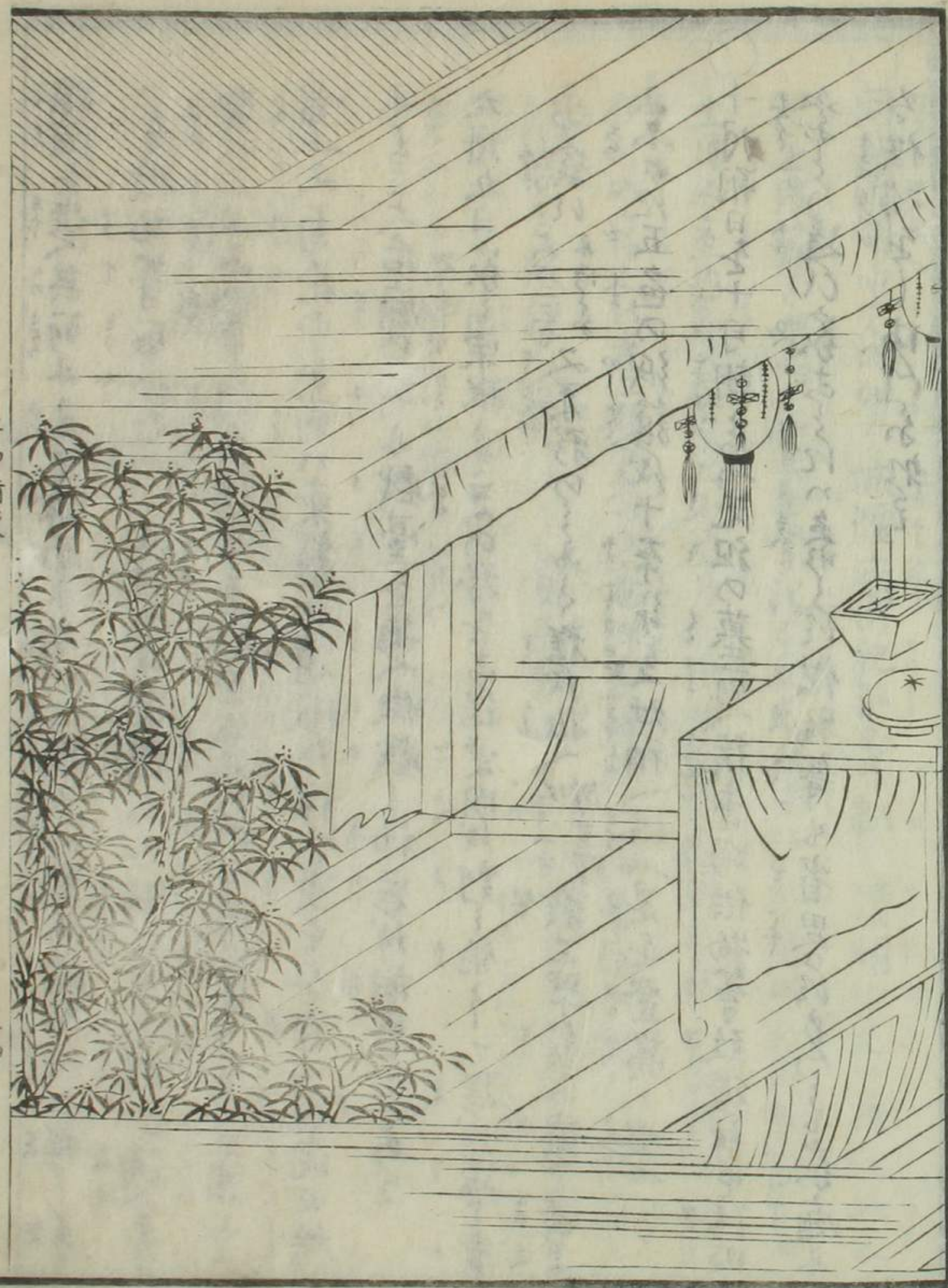
○同日中秋佳節とて近き親類内々月餅魚肉梨子栗柿等代互み送ふ

八月十五夜雨降ハ其年二月元日晴天多り十五日晴天あるは元日雨天と

○八月十八日辰潮生日とて海邊の地方ハ平潮の時刻濱をみ卓をたす

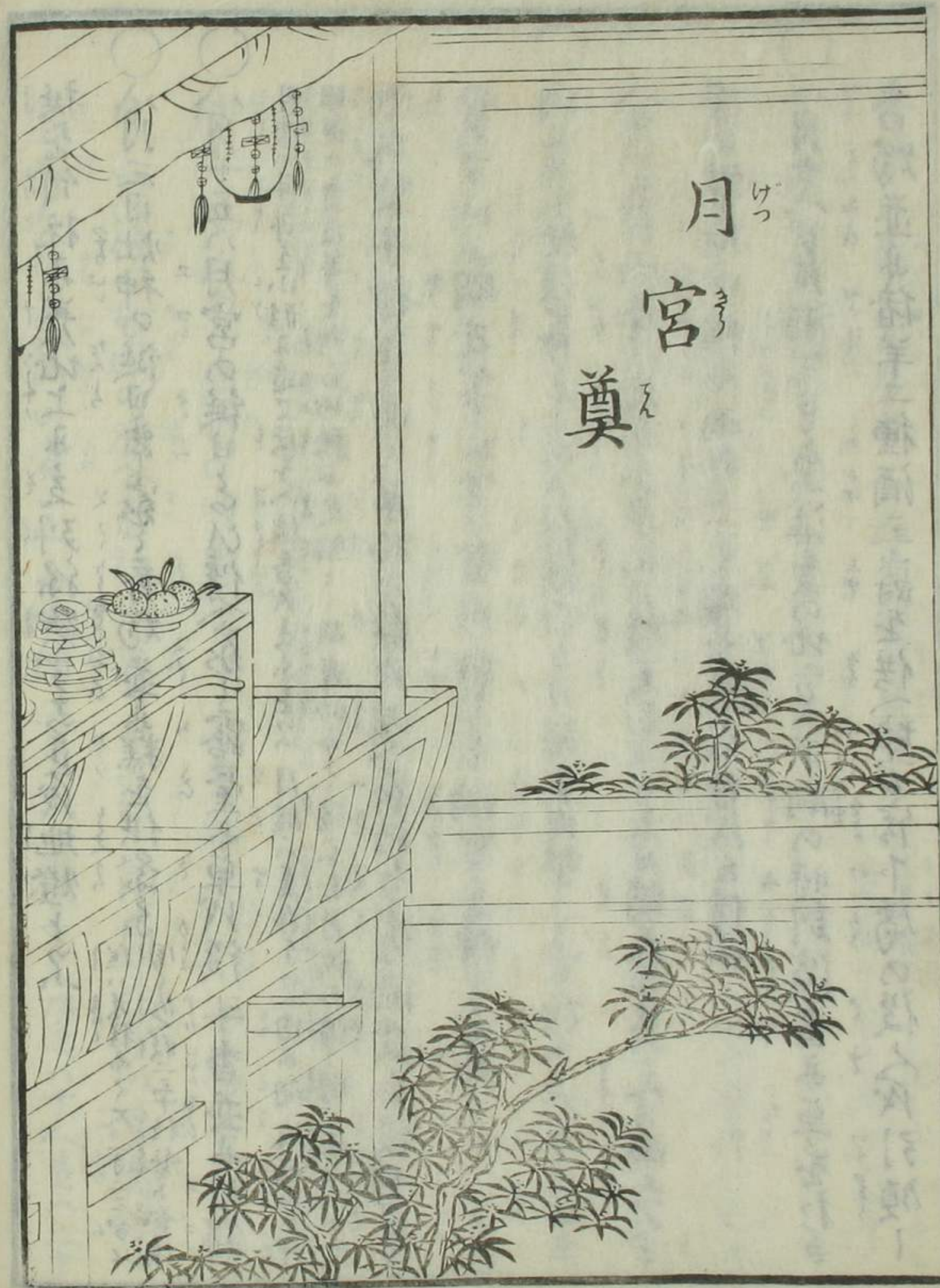
香燭並み猪羊二種酒三爵を供へ地方官下屬の役人代引願し

年中行交



廿四

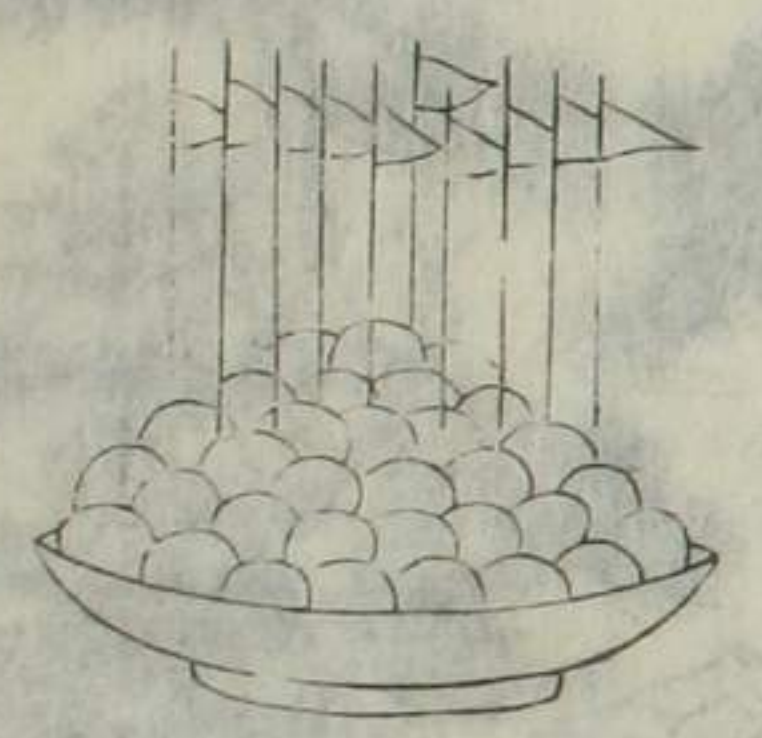
月げつ  
宮みや  
奠え



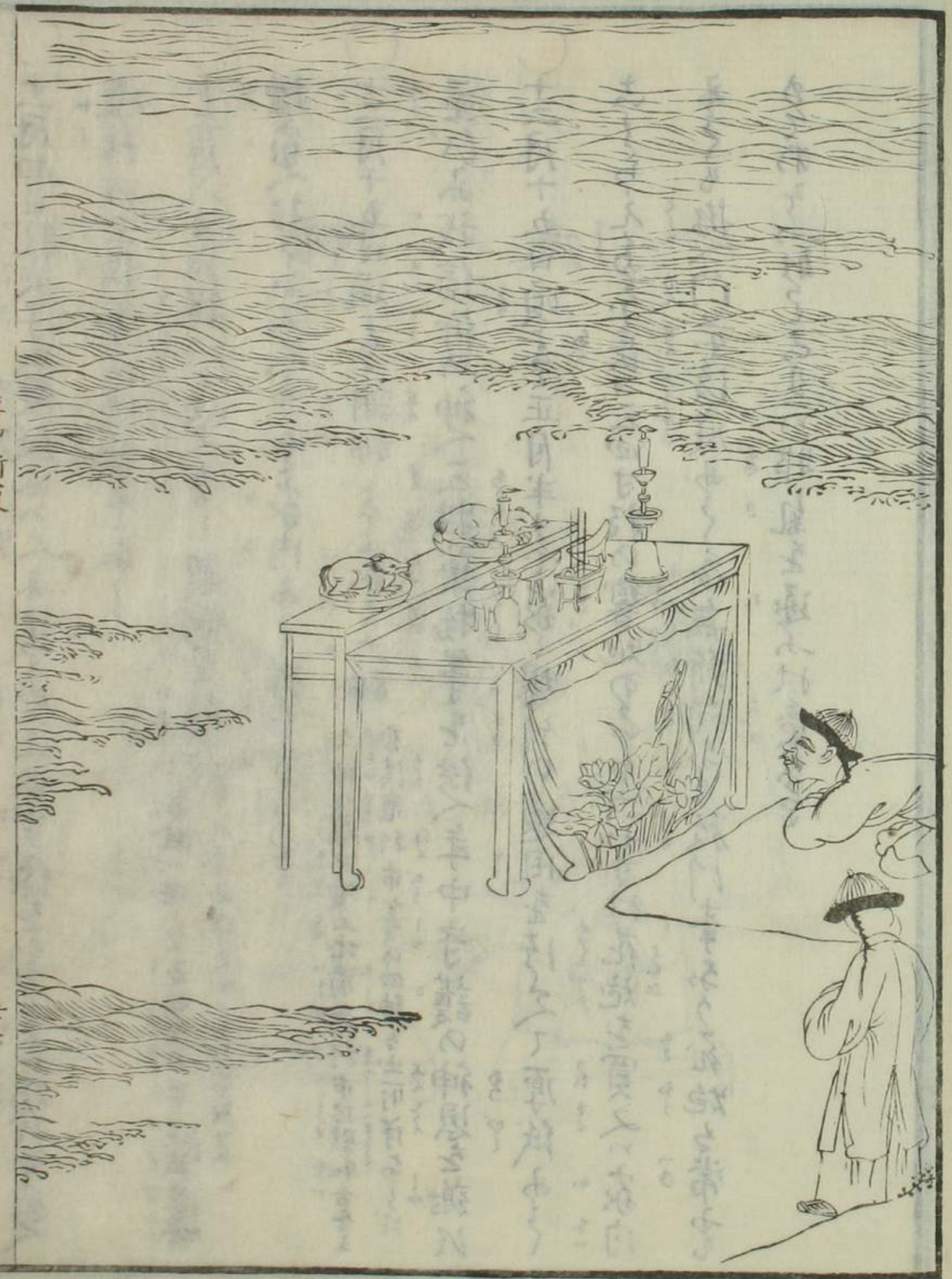
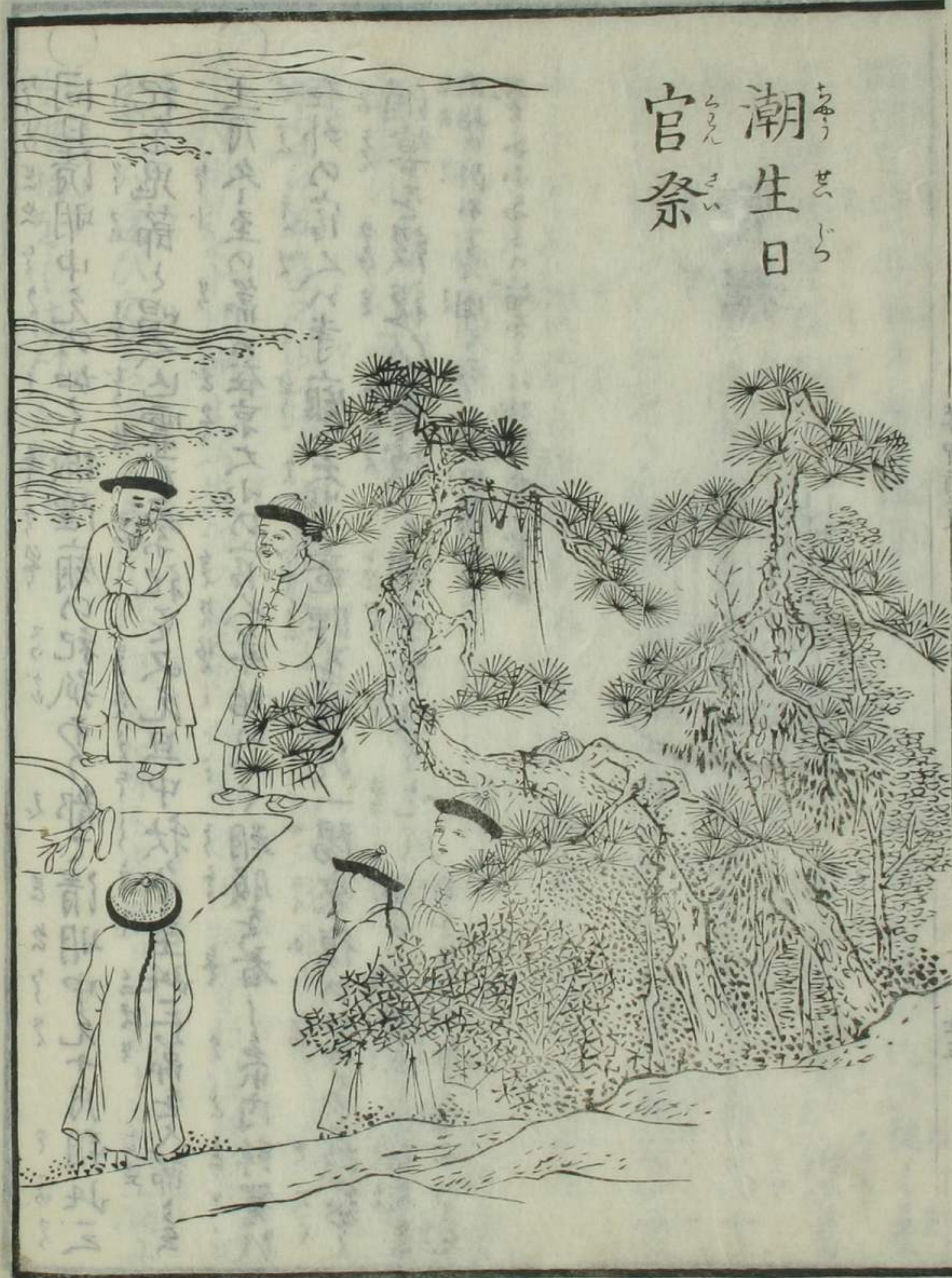
跟随を従へ其前み來る海面み向ひ二跪六叩首の禮を行ひ拜し  
 了て供物等取収む ○九月九日重陽みち朋友あつて誘ひ酒食を  
 携へ山上み登り待候作り糸竹を弄ひ終日遊戯是を登高也  
 唱ふ又菊花あつて前ハ東籬の遺風候傳へ賞ふ者も有同日所  
 みよと天后廟の前み戲臺を掲げ做戲し神恩候謝ふも有り  
 ○九月九日家々栗糕とて米の粉をすし糸栗肉候刻み縮めて糕候造り者  
 其の食法 大サ二三寸 又米粉のこもく糕候掲げ大サ一寸 数三四盃み盛ると其上  
 み小たれた五色の紙銀紙十奉けとて灶神へ供不足を登高と唱ふ  
 ○十月朔日を十月朝とて先祖の墓前へ詣香燭供物等致禮拜は清以  
 參りて遠ひ家志とていへるは供物等も省畧以りとも家々廟み  
 ち供物をし由り候なり

○同日清明中元の如く城隍廟の祀孤あり都て清明中元十月朔此二  
 祀を鬼節と唱へ亡靈を祭祀とて又且中秋を至此二節を人節とて  
 十月夕に至る節は在京大小の官人年始の如く朝服を着し糸内拜賀は  
 在外の官人の寺廟へ糸あり竜牌を拜し一陽來復の節あり故家々  
 酒宴を設け以貴族とも團子を作り吃し 團子一名團糸とて糯米を  
 大指の形をとて團くすらす白湯ゆく 粉をまき砂糖を縮みは丸  
 者か小あつて縮みは丸糖ゆく者あり

登糕



潮生日  
官祭



年中行夏

廿六

○十月四日孔子の聖誕コノアノイの聖誕ミタマの人のみよと堂上ウチノウラに聖像ミタマをたて香燭カウロウをたけ  
 禮拜レイハイ以三牲ミツシヤウ等の供物クキモノをたけ

○十二月八日戌臘ウラハ八ハチの唱ナカ寺テラに菓粥ワケチヨを炊カけ  
一名チラハ粥と云 臘ラハ八ハチ粥チヨと云 臘ラハ八ハチ粥チヨと云 臘ラハ八ハチ粥チヨと云

檀家タンカにたけふ又人ヒトの家にみく振ウラふ者モノもあつて

○十二月十五日過ワカし謝神シヤノカミとて祭マツルく六神ムツカミ  
六神ハ朝吉壇土地清竜利市招財和合を云

並ナラびみ我信仰ミガシヤウの神カミへ三牲ミツシヤウ菓物ワケモノ等を供マツルへ年中守護ナカノシヤウゴの神恩カミノオンを謝シヤウ以

○十二月十五日頃ヨリより正月トウゴト半ナハまで爆竹ハツシヤウの遺風イコウをたてて厚紙アサヒみく

ふくらしえふふ長ナガサ三四寸サハシヨウ程マデの響炮ヒヤンパウあつて六七寸ヒヤンパウは花炮ハナパウを買カひ又マタに家内ウチノウラ

みくも振ウラへ門カド前マヘ後ノチ庭ニワみく夜毎ヨノミ新向ニヤウみく放ハクし事コトあり花炮ハナパウと常トコあり

めて前マヘより後ノチより邪氣ジャキを逐ウラふれ意イあり



○十二月廿日頃より廿五(六)日迄の内家々年程を制衣以後、内程を以て、砂糖を以て、更、赤き菫、菫み入る、以て、此其形ゆらねを其すに用ちあらんと二四(五)みあぐ四又(五)金銀の形かうらふありあり大小等か、其寒中みあぐ制衣す事にあらば

○十二月廿日頃より吉日代撰と掃塵又ら打掃と唱(家)屋を掃除を定日あふ家々吉日代撰を以て ○十二月廿四日の灶神上天の日とて家々み香燭豆腐菓子等を供(禮)拜し神を送る云月元朝み至る同換み供物して神を迎ふ且年中参り置る灶君の札並びみ聯を右上天の日み副元朝未明み新み書張ふちを札聯と何れも赤紙あり

札 聯

伍方伍帝司命灶君

魏々聖德乾坤大

永々皇圖日月長

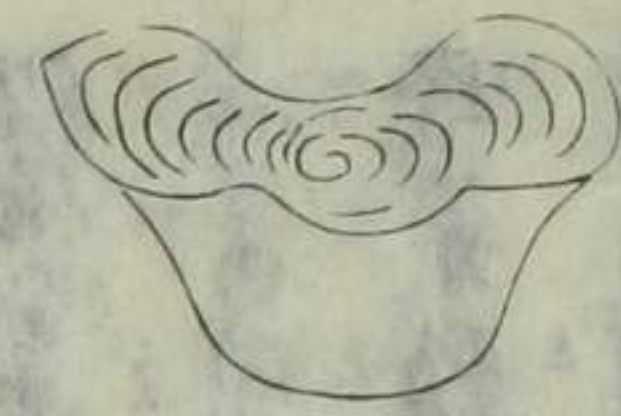
○十二月廿四日を親類たぐみ歳暮の贈り物とて年程魚肉海參魚翅胡桃柿餅橘子橄欖竜眼等を送る

○十二月廿七日より近き親類の内十歳前後の児女あはれ互み年程橄欖胡桃竜眼橘子銀子等を送る是を押歳錢と云大戸、百日程より二三、十目迄二挺、四挺、又

半の敷を用ひて小戸の錢中、を歳暮み送る者、年始み送る且使の者、其百個二百日程を不同あり、祝儀を遣は銀又ハ錢、みくも赤紙み包み上母尊使或は代茶と書回

○同日の頃寺々を節禮のおくり物とて檀家其外とも懇意の向(野)菜類あはれみ寺中みく制衣したる菓子あはれ梅花等の鉢本、はら折枝形を有合みはらせ取添送る大戸の向と多分はらふ、其品み應へ銀子をのりく厚く返禮を小戸もさし准へ返礼あり

金銀錠



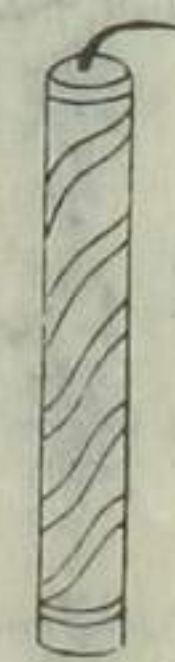
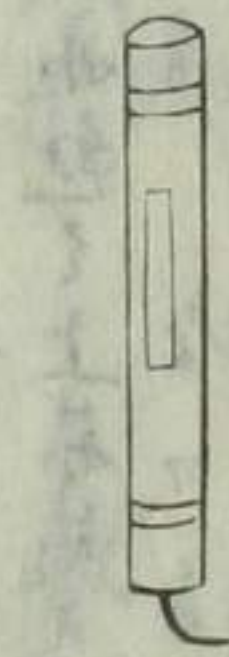
響炮



年糕



花炮



符 桃



除夜みら官府大戸の向桃符とて聯の中みまらふと板一對み幅六寸

わと長三門柱 竜虎朝官桃柳平升三級の圖を彩畫し 竜虎の竹み書紙

二の門の左右み掛邪氣伐ちぬ又庶人を歡樂紙とて長さ二尺余幅

一尺程の赤紙み上ぬる金箔みく福の字を切付下は四方の縁み

花形伐彫其中の種々の紋を彫みくみ指日高升加官進爵

福自天來平升三級天官賜福の圖を指みく切付み五枚

右一句の圖を一枚み切 堂の正面上楹みく張み又官府大戸の神茶鬱

壘二神の儀伐 門神あり 塗板の扉み畫みくを前廣み彩色を

加み小戸の版み摺みく神儀伐買み又神名伐赤紙み書扉の左

右み張み且貴賤とも家の正面板等へ迎福招慶如意れを

とふ吉利の句伐書くと貼み

紙 樂 歡

福



福



○除夜み家内打寄酒宴を設け年底の祝事を主人より銀又ハ残小

高も家族残らば百使の奴婢までおろし足をつ分歳と云

上小赤紙を貼ふるは此方より慶牛を分る意あり

○同夜み万年糧と唱へ淘籬二つみ草と飯を盛り上み松拍の枝を挿

摘子養子を並元日と云三日まで内室みかきりなく是ハ家み餘糧

ありて食みえりうさみ表す不意あり

○除夜と人みよと歳を守りて寝さる者もあり

○立春の前日み府州縣とも大歳と春牛と成りしる也

小児を以て神像成り装束を以て春牛と竹中く高さ三四尺み牛の角を

はる紙ゆくと彩色は又五寸程の小牛成りしる也大牛の腹内み入るに

堂みおせ大歳み春牛成挽せ郊外み重其比の幸官ハ衣服をわく

免轎子みあり下屬の吏役と終りみ春花をわく也

太歳一名芒神  
土中七八葉の  
梅花桃花等成猪  
かきりしる也



萬年糧



一又はよみ 出迎へ金鼓を打涼傘を以て行列へ行春とてあつてく都外  
を名うて並み城市に入りふりて成迎春とて知府堂上り清い  
置 緑ふれは縁の 羽立は春の時刻なりと清官吏より成清い出  
下役等銘々竹杖棒成りち金鼓をありて守護して廟裏に送り  
まう太歳を安置し持し棒やち大牛をうちをぬき肉の小牛成  
取出し大歳の前み居を足豊年の吉瑞を表すか意あり又  
太歳を工廟に送り途中みく市中の小児ども大豆をりて牛成  
打ちしとみ打當面は疱瘡輕くしては傳ふ

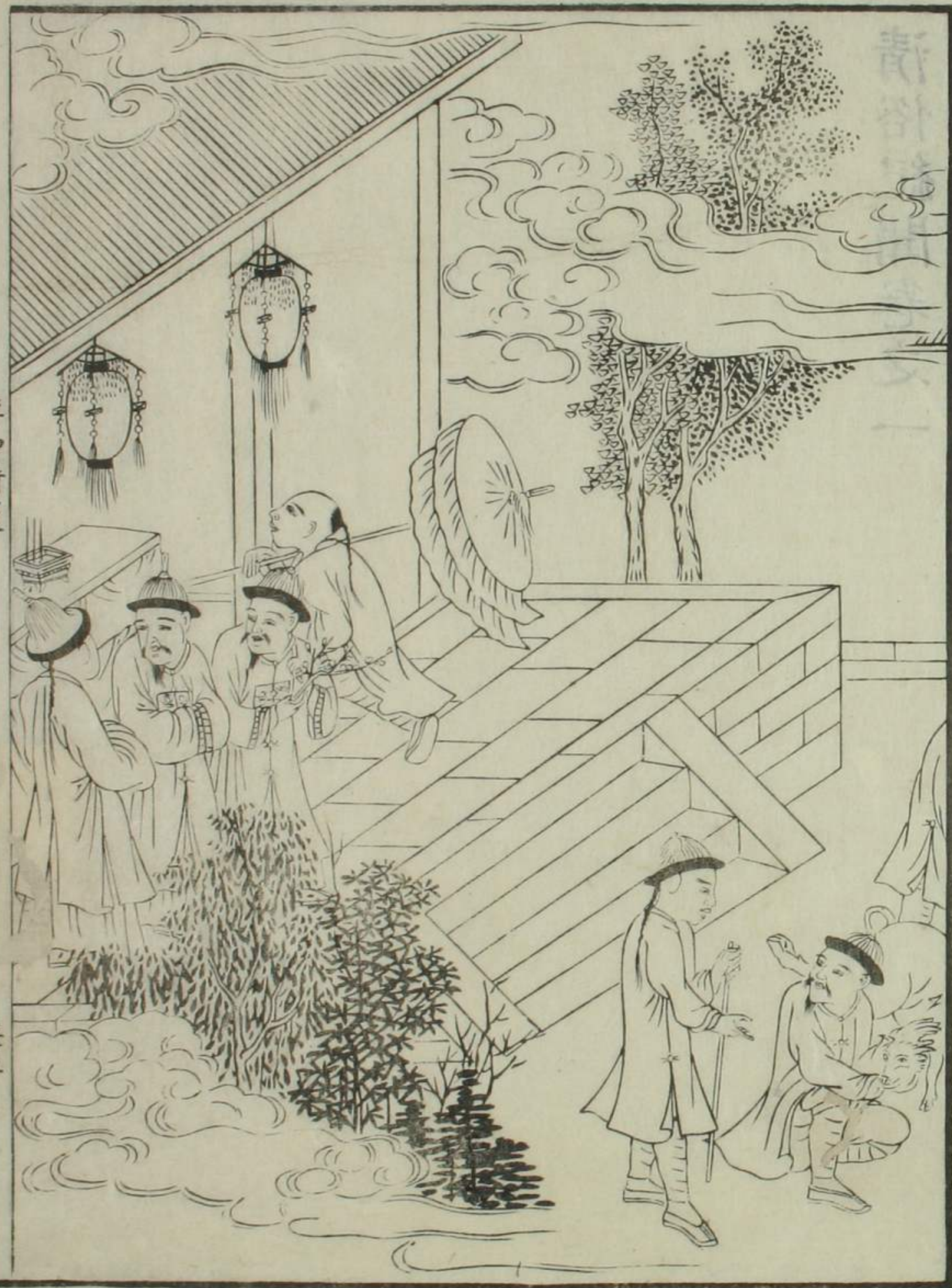


年中行夏

三十二

太歲たいさい  
 春牛しゅんぎう  
 迎春いんしゅん





年中行夏

三十三



太歲廟打牛

清俗紀聞卷之一

